

The Pilgrims' View on Islam, Muslims and Crusades, 1551-1570 : Reconsideration on the Later Crusades (8)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 櫻井, 康人 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/541

研究ノート

1551年～1570年の聖地巡礼記に見るイスラーム 観・ムスリム観・十字軍観 —— 後期十字軍再考 (8) ——

櫻井 康人

はじめに

- I. ムスリム観・イスラーム観
 1. 海上における恐怖
 2. 強欲なトルコ人役人たち
 3. 奴隷とされた巡礼者たち
 4. イスラーム信仰者としてのトルコ人
- II. 十字軍観・聖地回復の希望
 1. 聖墳墓の騎士
 2. 「十字軍」の記憶
 3. 聖地回復の希望と「十字軍」の希望

おわりに

はじめに

これまでに筆者は、いわゆる後期十字軍を再考するために聖地巡礼記に焦点を当ててきたが⁽¹⁾、本稿で対象となるのは1551年から1570年、すなわちオスマン帝国による西地中海への進出からレパントの海戦前夜までである。F・ブローデルの大著『地中海』を中心に、当該時期の地中海世界を素描すると、次のようになる⁽²⁾。

⁽¹⁾ 拙稿「後期十字軍再考(1) — 14世紀の聖地巡礼記に見る十字軍観 —」『ヨーロッパ文化史研究』7号、2006年、1～50頁(以下、「後期十字軍再考(1)」と略記); 拙稿「後期十字軍再考(2) — 14世紀の聖地巡礼記に見るイスラーム世界 —」『ヨーロッパ文化史研究』8号、2007年、37～75頁; 拙稿「15世紀前半の聖地巡礼記に見る十字軍・イスラーム・ムスリム観 — 後期十字軍再考(3) —」『ヨーロッパ文化史研究』10号、2009年、53～100頁(以下、「後期十字軍再考(3)」と略記); 拙稿「1450～1480年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観 — 後期十字軍再考(4) —」『ヨーロッパ文化史研究』12号、2011年、179～227頁(以下、「後期十字軍再考(4)」と略記); 拙稿「1481～1500年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観 — 後期十字軍再考(5) —」『ヨーロッパ文化史研究』13号、2012年、199～246頁(以下、「後期十字軍再考(5)」と略記); 拙稿「1501年～1530年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観 — 後期十字軍再考(6) —」『ヨーロッパ文化史研究』14号、2013年、99～133頁(以下、「後期十字軍再考(6)」と略記); 拙稿「1531年～1550年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観 — 後期十字軍再考(7) —」『ヨーロッパ文化史研究』15号、2014年3月、73～97頁(以下、「後期十字軍再考(7)」と略記)。

⁽²⁾ ブローデル・F(浜名優美訳)『地中海』8巻・9巻、藤原書店、1999年。

1545年から1550年の間に地中海世界は平和を享受したが、1551年8月14日のトリポリ陥落を皮切りに、西地中海世界もオスマン帝国の脅威に晒されることになる。サファールヴィー朝との戦いはオスマン帝国が西方進出に本腰を入れるのを妨げたが、1555年5月29日に両国間で締結されたアマスィヤの和約の結果、オスマン帝国の目は再び西方に注がれることとなった。相前後してアルジェリア全域を支配下に入れたオスマン帝国は、1560年にはジェルバ島でスペイン軍に大打撃を与えることに成功したが、ブローデルはこの時をもってオスマン帝国の「絶頂期」としている。サファールヴィー朝との対立の再燃やスルタン位継承を巡る内紛に苦しんだ1561年から1564年にかけては、オスマン帝国は地中海における活動を収縮させ、1562年には長年の宿敵であった神聖ローマ帝国と和睦する必要に迫られた⁽³⁾。その後の1564年5月18日、オスマン帝国はマルタ島の攻囲戦を開始するも最終的には同島の制圧に失敗し、1566年には教皇ピウス5世の呼びかけによって対オスマン帝国のための神聖同盟が結成される。同年にはハンガリー戦争が再燃し、またオスマン帝国海軍によるアドリア海進出も見られたが、スレイマン1世の死をもってヨーロッパ世界は事なきを得ることとなった。スレイマンを継いだセリム2世は、父親のような好戦的な政策を展開することはなく、1568年には神聖ローマ皇帝マクシミリアン2世と再び和平を締結し、翌年にはフランス国王シャルル9世と通商条約を締結するなどの外交政策を展開した。1568年のグラナダ戦争への介入の結果として1570年にはチュニスを占領し、1571年8月には長年の懸案であったキプロス島の占領に成功するものの、同年10月にはレパント沖の海戦においてヴェネツィア・スペイン・教皇庁の連合軍に敗北を喫することとなった。

ブローデルは、1559～1565年を「トルコの覇権の最後の6年」とする。この是非はさておくとしても、少なくともレパントの海戦の終結に至るまでは、ヨーロッパ世界にとって地中海域は不穏な状態であり続けたであろう。このような状況を原因の一つとして、例えばU・ガンツ＝ブレットラーは16世紀前半に「聖地巡礼の黄金期」が終焉を迎えたとしている⁽⁴⁾。確かに、聖地巡礼記が1521年以降にその数を大きく減少させていったことは、拙稿でも確認した通りである⁽⁵⁾。しかしながら、1551年以降においてもその傾向が続く、

⁽³⁾ 当然のことながら、オスマン帝国の活動がまったく見られなかったわけではない。例えば、1562年、コジモ・デイ・メディチはティレニア海に進出してきたオスマン帝国に対抗するために、サント・ステファアーノ騎士団を創設した。北原敦編『新版世界各国史15 イタリア史』山川出版社、2008年、240頁。

⁽⁴⁾ Ganz-Blättler, U., *Andacht und Abenteuer: Berichte europäischer Jerusalem- und Santiago-Pilger (1320-1520)*, 2 Aufl., Tübingen, 1991.

⁽⁵⁾ 拙稿「後期十字軍再考(7)」80頁。

あるいはその傾向に拍車がかかったわけではなかった。むしろ、1550年代以降に聖地巡礼記の数は再び増加傾向を示すのである。本稿の対象時期に作成された旅行記の全41作品を、これまでの拙稿における区分に従って分類していくと⁽⁶⁾、A群（メモワール）が1作品、B群（旅行記・地理書・歴史書）が9作品、C群（創作・伝記・年代記）が1作品、D群（聖地巡礼記）が24作品、E群（巡礼ガイド）が2作品、F群（その他）が4作品となる（表1）。

では、これまでの時期と比較することで⁽⁷⁾、当該時期に作成された旅行記の全体的な特徴を確認してみよう。大きな変化が見られないC群を除いて、まず気がつくのは約半世紀ぶりにA群の作品が現れることである。これまでの時代に作成されたメモワールと同様に、フランス王権と聖地回復の希望との結びつきをここに確認することができる。また数こそ少ないものの、E群の作品も約半世紀ぶりに姿を現す。E-1の作品は、15世紀末から展開されていった巡礼者、とりわけ聖墳墓の騎士叙任を受ける者に対する管理体制の強化を受けて作成されたのであろう⁽⁸⁾。E-2の作品は、「聖地巡礼の黄金期」が終わったと考えられている16世紀後半においても、聖地巡礼に対する熱意が継続していた、もしくは再燃したことを示している。この点は、当該時期に可視的な巡礼ガイドの役割を果たす図像資料が登場し、それがF群の大多数を占めていることから見て取ることができる。

次にB群について、数字上では1531年以降の増加傾向をそのまま引き継いでいると言えるが、1531～1550年の間では多数を占めたフランスの外交使節の旅行記が姿を消していることが確認される。ユグノー戦争から本格化する宗教・政治的混乱が、フランス王国の人々に海外へ出立することを困難にしたのかもしれないが、このことは本稿の主たる対象となるD群にも当てはまる。また、フランス地域と同じ傾向を見せる低地地方についても、いわゆる八十年戦争へと繋がるスペイン国王フェリペ2世との対立が聖地巡礼者の数、引いては巡礼記作者の数の減少を導いたと考えられるのかもしれない。

一方で、当該時期にはドイツ地域出身の巡礼記作者が再び多数を占めることとなる（地図）。そもそも「聖地巡礼の黄金期」を支えていたのは多くのドイツ人巡礼者たちであり、1520年代以降に見られる巡礼記数の急激な減少は、宗教改革運動に付随した政治的・社

⁽⁶⁾ 拙稿「後期十字軍再考（1）」10～28頁；拙稿「後期十字軍再考（3）」55～71頁。なお、本文および注の中で触れられる史料の表記方法についてもこれまでの拙稿に準じて、表1に付随する参考文献リストの整理番号に従って記すが、D群はその数字のみを記すこととする。

⁽⁷⁾ 拙稿「後期十字軍再考（1）」12～28頁；拙稿「後期十字軍再考（3）」55～70頁；「後期十字軍再考（4）」180～197頁；「後期十字軍再考（5）」202～217頁；「後期十字軍再考（6）」100～115頁；「後期十字軍再考（7）」74～82頁。

⁽⁸⁾ 拙稿「後期十字軍再考（6）」125～127頁；拙稿「後期十字軍再考（7）」91頁。

表1 1551～1570年の旅行記リスト
(レーリヒト: 56, トプラー: 26, シュル: 14, ゴメス: 14)

A メモワール (聖地回復論覚書)

整理	名	年	出身	社会	言語	Rö	To	Sc	Go	備考
1	ジャン・ド・ボワシエール	1555	ボワシエール	騎士	仏	706				その図書室を開放してくれたフランス国王アンリ2世の顧問官ベルトランに捧げる。オスマン帝国からのバルカン半島の解放を訴える。

B 旅行記・地理書・歴史書

整理	名	年	出身	社会	言語	Rö	To	Sc	Go	備考
1	シュヴァガール・テイレマンス・ステツラ	1552	ジーゲン	地理学者	羅	697				地図。
2	シャルル・エティエンヌ	1552	パリ	フランス国王アンリ2世の印刷所長	仏	698				フランス王国内の地理に関する書。この書物自体には聖地に関する記述はないが、多くのフランス人巡礼者が王国内の移動時に参照した。
3	カスパー・ポイカー	1554	ヴィッテンベルク	宗教改革者・医学者・数学者・天文学者	羅	704				プロカルドウス・モナクス・ヨアンネス・タクイヌスやフィリップ・メランヒトンの聖地に関する地理書・歴史書を編纂したものの。
4	アダム・ライスナー	1555	ミンデルハイム	神学者・歴史家・音楽家・詩人	高独	708				マルティン・ルターなどと共にヴィッテンベルク大学で神学を学ぶ。聖書を基にした聖地の地理・歴史情報。ごく簡単なが、エルサレム国王たちに関する記述もあり、1517年のスレイマン1世による聖地周辺域占領までを記す。
5	アレクサンドロ・マグノ	1557-1565	ヴェネツィア	貴族・商人	伊	712				商業記録・航海記録などを含む旅行記。キプロスやアレクサンドリア・カイロまで至るが、シリア・パレスチナに関する記述はなし。
6	ルドヴィコ・ガッロ	1561	ヴェネツィア	貴族	伊	723				インドにまで至る旅行記。聖地も経由するが、それに関する記述はなし。

7	ギョーム・オーベール・ド・ボワティエ	1562	パリ	パリ高等法院 弁護官	仏	732				イスラームやトルコ人の起源および第1回十字軍の歴史書。
8	フェルディナント・ベルテッリ	1566	ヴェネツィア	地理学者		744				地図。
9	ゲラルドウス・メルカトル	1567	フランドル	地理学者	羅	745				地図を作成するための情報を記した書簡。

C 創作・伝記・年代記

整理	名	年	出身	社会	言語	Rö	To	Sc	Go	備考
1	クリストフォロ・アルメノ	1557	タブリーズ	著述家	伊	716				3人のセイロンの王子の旅行記をペルシア語からイタリヤ語に翻訳し、ヴェネツィア貴族のマルカントニオ・ジュステイニアノーに献呈。

D 聖地巡礼記

整理	名	年	出身	社会	言語	Rö	To	Sc	Go	備考
1	ジークムント・チュンガー	1551	ヴェルツブルク	社会 司教座教会聖 堂参事会員・ 法学者	高独	696	1			
2	ダニエル・エックリン	1552	アーラウ	薬剤師	高独	701	5	185	32	ヤーコープ・ホルンス・ツ・シュヴァーア・ビッセン・グミエントに随行。
3	ジョン・ロック	1553	イングランド	修道士	英	703				
4	ファン・ペレイラ	1553	スペイン	フランチャエス コ会士	羅			434	61	
5	アントニオ・ソアレス・ダ・アルベルガリア	1554	アルコバサ	シトー会士; ポルトガル王 子エンリケの 顧問官	葡	705	6			
6	ガブリエル・ジローデ	1555	トゥールーズ	司祭	仏	707	7		40	ロレーヌ公シャルル3世の従妹ルイーズに捧げる。

7	ヴォルフガング・ミュンツァー・フォン・ハーベルク	1556	ニュルンベルク	市参事会員, 貴族, 宗教改革者	高強	709	9	405		D-8・D-9と共に巡礼。D-9と共に、1557年から1559年にかけて、オスマン帝国の捕虜となり、ガレー船奴隷として働かされる。フランス国王の外交使節の尽力により解放される。
8	ハンス・フォン・エーレンベルク	1556	エーレンベルク	貴族	高強	710	8	189	35	D-7・D-9と共に巡礼。ラムラにて監禁されているD-7・D-9を訪問して激励。
9	メルヒオール・フォン・ザイドリッツ	1556	ニクウスドルフ	貴族	高強	711	10	545	68	D-7・D-8と共に巡礼。D-7と共に、1557年から1559年にかけて、オスマン帝国の捕虜となり、ガレー船奴隷として働かされる。フランス国王の外交使節の尽力により解放される。
10	パンタレオ・ダヴェイロ	1559-1565	アヴェイロ	フランチェスコ会士	葡	700	3	42	60	トリエント普遍教会会議に出席した後に聖地へ戻るE-11と同行して聖地巡礼を行う。D-19と聖地にて一時行動を共にする。
11	バルトロマエ・ケーフエンフユラー	1561	フランケンベルク	伯	高強	726				D-12と共に巡礼。
12	アルブレヒト・ツ・レーヴェンシュタイン	1561	レーヴェンシュタイン	伯	高強	727	16	352	54	D-11と共に巡礼。また、聖地においてD-13と合流し、共にシナイ山への巡礼を行う。
13	ヤーコプ・ヴォルムブゼー	1561	シュトラースブルク	騎士	高強	730	17	653	85	聖地においてD-12と合流し、共にシナイ山への巡礼を行う。船りのアレクサンドリアにおいて、約2か月間オスマン帝国の捕虜となる。
14	アレグザンダー・フォン・パッペンハイム	1563	バート・グロナーネンバハ	貴族	高強	736				
15	ルイージ・ザルカーノ	1563	パドゥーラ	フランチェスコ会士	伊	735			81	
16	ヤーコプ・ドウルクス・ボツケンベルク・ファン・ハウデ	1565	デン・ハーグ	貴族	低強	738	22		16	
17	ヨハン・ヘルフェリヒ	1565-1566	ライプツィヒ	市民	高強	739	20	270	43	聖地まではD-18と同行。カイロからシナイ山への巡礼においてD-21と同行。

18	ベーター・ヴィッリಂಗガー	1565-1566	ルツェルン	司祭	高独	740	21	611	78	聖地まではD-17、ロードスまではD-20と同行。ロードスでオスマン帝国の捕虜となり、約1年間ガレエ船奴隷として働かされる。イスタンブールのヴェネツィア領事アントニオ・アルジェロにより買い戻され解放される。
19	ギョーム・マルタン	1565	ブザンソン	司教座教会聖堂参事会員	仏					E-1により聖地を案内される。D-10と聖地にて一時行動を共にする。
20	アドリアン・ファン・フラミング	1565	ドルトレヒト	市参事会員	低独	741			79	ロードスまではD-18と同行。
21	クリストフ4世・フュラー・フォン・ハイメンドルフ	1566	ニュルンベルク	都市貴族	羅	742		257		カイロからシナイ山への巡礼において、D-17と同行。
22	ギユロ・フス	1566	ラシーニヤ	修道士	羅	743				1532年のスレイマン1世によるハンガリー侵攻の際に捕虜となるが、翌年にハンガリー国王ヤーノシュ1世によって解放された経緯を持つ。
23	ルートヴィヒ・フォン・ラウター	1567-1571	フィッシユエハウゼン	外交使節	高独	746		469		バイエルン公アルブレヒト5世の外交使節としてイスタンブールに派遣される。その帰りに、エルサレムおよびシナイ山への巡礼を行う。
24	ヨハン・フォン・ヒルンハイム	1569	ホーフホルデルン	騎士	高独	747		279		D-14の従兄弟。D-14に刺殺されて巡礼を行う。

E 巡礼ガイド

整理	名	年	出身	社会	言語	Rö	To	Sc	Go	備考
1	ボニアツァイオ・ステファニー	1552-1563	ラゲーザ	フランチェスコ会聖地管区長	羅	699	2	81	70	祈禱文を中心とした巡礼指南書。作者は、1553年以降、聖墳墓の騎士の叙任式に携わる。
2	不詳	1556	アントウェルペン		低独	714				ローマ・エルサレム巡礼のためのガイド。

F その他

整理	名	年	出身	社会	言語	Rö	To	Sc	Go	備考
1	ダーヴァイト・フォン・フュルテンバハ	1561	フエルテンバハ	版画家	高独	722				シナイ山の版画。ヴェネツィアからシナイ山までの旅程も付される。自身は聖墳墓の騎士でもあった。
2	ヨハン・ゴットシャルク・イーゼルマン	1561	ケルン	地理学者・版画家	低独	725	13			地図。その中で、1561年に自ら聖地巡礼を行ったこと、また1563年には彼の義妹が聖地巡礼を行ったことが記される。
3	不詳	1566	ヴェネツィア		伊	744				解説付きの地図。
4	カルロ・マツジ	1568-1573	ヴェネツィア	貴族		750				絵画。1568年に聖墳墓の騎士となったことや、1571年のレバントの海戦でオスマン帝国の捕虜となったことが描かれる。

注：(1) 表1・表2は、以下の史料およびその編者による解説を基にして作成した。

- (2) 略号は次の通り。To = トプラー (Tobler, T., *Bibliographia geographica Palaestinae, Eine kritische Übersicht gedruckter und ungedruckter Beschreibungen der Reisen ins Heilige Land*, Leipzig, 1867.), Rö = レーリヒト (Röhricht, R., *Bibliotheca geographica Palaestinae, Chronologisches Verzeichniss der Auf die Geographie des Heiligen Landes bezüglichen Literatur von 333 bis 1878 und Versuch einer Cartographie*, Berlin, 1890.), Sc = シュール (Schur, N., *Jerusalem in Pilgrims' Accounts: Thematic Bibliography of Western Christian Itineraries, 1300-1917*, Jerusalem, 1980.), Go = ゴメス = ジェローム (Gomez-Géraud, M.-C., *Le crépuscule du Grand Voyage: les récits des pèlerins à Jérusalem (1458-1612)*, Paris, 1999.)
- (3) レーリヒト, シュール, ゴメス = ジェロームについては、その整理番号に依拠している。トプラーは整理番号を付けていないので、該当範囲内において筆者が1から整理番号を付けた。

史料

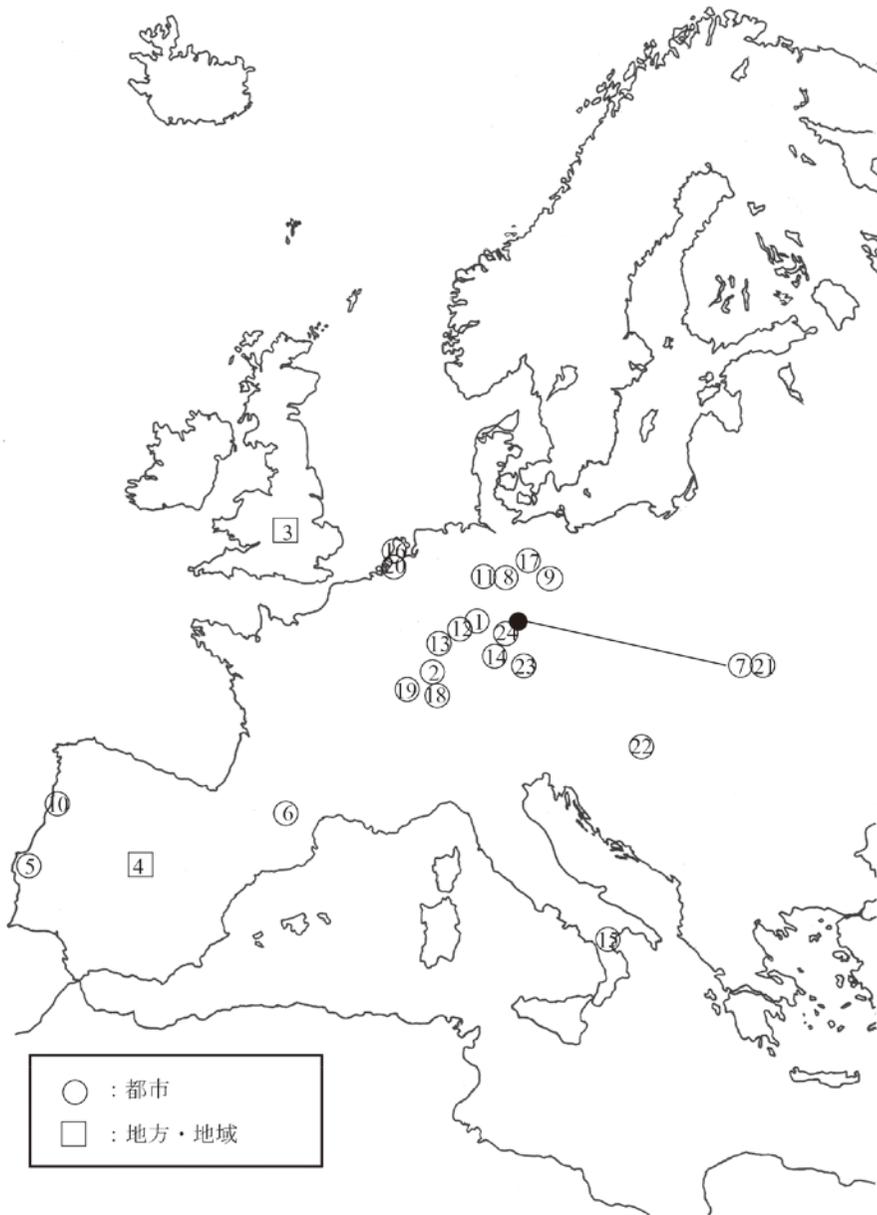
- A-1: *La croisade de Jean de Boissières, escuyer sieur de la Boissière en Auvergne. A Monsieur Berterand, conseiller et advocat general du roy, en sa chambre des comptes à Paris*, 1584.
- B-1: *Descriptio Palaestinae cum explicationibus Philippi Melancthonis*, Witebergae, 1552.
- B-2: *La guide des chemins de France*, Paris, 1552.
- B-3: Peucer, K., *De dimensione terrae libri duo*, Wittebergae, 1554.
- B-4: Schmabe, J. (Hrsg.), *Jerusalem. Die Alte haubstiat der Juden, wie sie vor der Zerstörung auf dem hohen Gebirge, mitten in der Welt, als das irdische Paradies, ein Vorbild der ewigen Stadt Gottes war*, Frankfurt a. M., 1894.
- B-5: Naar, W. (éd.), *Alessandro Magno gentilhomme vénétien, Voyages (1557-1565)*, Paris, 2002. (仏訳付)
- B-6: Barozzi, N. (a cura di), "Descrizione del viaggio di un Veneziano alle Indie nel 1561", *Lo Spettatore, rassegna letteraria, artistica, scientifica e industriale*, 3, 1857, pp. 220-222.
- B-7: *L'histoire des guerres faictes par les Chrestiens contre les Turcs, sous la conduite de Godefroy, Duc de Baillon, pour le recouvrement de la terre sainte*, Paris, 1562.
- B-8: Wieder, F., *Niederlandsche historisch-geographische documenten in Spanje*, Leiden, 1915, no. 69.

- B-9: Raemdonck, J., "La géographie ancienne de la Palestina. Lettre inédite de Gérard Mercator à André Masius, Duisbourg, 22. Mai 1567", *Annales du cercle archéologique du pays de Waas*, 10, 1885, pp. 41-106.
- C-1: Bragantini, R. (a cura di), *Peregrinaggio de tre giovani fighiuali del re di Serendippo*, Roma, 2000.
- D-1: Röhrich, R. und Maisner, H. (Hrsg.), *Deutsche Pilgerreisen nach dem Heiligen Lande*, Berlin, 1880, S. 414-423.
- D-2: Feyerabend, S., *Reyssbuch dess Heyligen Lands, das ist, ein grundtliche Beschreibung aller und jeder Meer und Bilgerfahrten zum Heyligen Lande. Beneben ... eigentlicher Beschreibung ... Palestinz ... Ferner auch der ... Land Indien und Persien ... Endlich von gemeldter Ort ... jetziger Eynwohner, Turcken und Araber*, Franckfort am Mayn, 1609, S. 749-758.
- D-3: Haklyut, R., *The Principal Navigations Voyages Traffiques and Discoveries of the English Nation*, rep. 5, New York, 1969, pp. 76-105.
- D-4: Luke, H. (tra.), *A Spanish Franciscan's Narrative of a Journey to the Holy Land*, London, 1927. (英訳)
- D-5: Pereira, M. (ed.), *Itinerário à Casa Santa do padre frey António Soares da Albergaria*, Faveiro, 2005.
- D-6: Giraudet, G., *Discours du voyage d'outre mer au saint sepulchre de Jerusalem*, Tolose, 1583.
- D-7: *Reyssbeschreibung Dess Wolffgang Müntzers von Babenberg Von Venedig auss nach Jerusalem/ Damascus und Constantinopel/ und dann wider nacher Venedig: Darinnen die gelegenheit derselben Länder/ Imwohnenden Völcker/ Sitten und Gottesdienst/ etc. Insonderheit die eygentliche beschaffenheit dess H. Grabs/ und anderer Oerter begriffen und vermeldet; Inglichen wie Er Müntzer bey 3. Jar lang in der Türckey gefangen gewesen/ was er daselbst in wärender Dienstbarkeit aussgestanden*, Lochner, 1624.
- D-8: Feyerabend, *Reyssbuch dess Heyligen Lands, das ist, ein grundtliche Beschreibung aller und jeder Meer und Bilgerfahrten zum Heyligen Lande. Beneben ... eigentlicher Beschreibung ... Palestinz ... Ferner auch der ... Land Indien und Persien ... Endlich von gemeldter Ort ... jetziger Eynwohner, Turcken und Araber*, S. 510-514.
- D-9: Feyerabend, *Reyssbuch dess Heyligen Lands, das ist, ein grundtliche Beschreibung aller und jeder Meer und Bilgerfahrten zum Heyligen Lande. Beneben ... eigentlicher Beschreibung ... Palestinz ... Ferner auch der ... Land Indien und Persien ... Endlich von gemeldter Ort ... jetziger Eynwohner, Turcken und Araber*, S. 466-509.
- D-10: *Itinerario da Terra Santa, e suas particularidades*, Lisboa, 1585.
- D-11: Czerwenka, B., *Die Kheuenhüller: Geschichte des Geschlechtes mit besonderer Berücksichtigung des XVII. Jahrhunderts*, Wien, 1867, S. 185-215.
- D-12: Feyerabend, *Reyßbuch deß heyligen Lands, Das ist Ein grundtliche beschreibung aller und jeder Meer vnd Bilgerfahrten zum heyligen Lande, so bißhero, in zeit dasselbig von den Vngläubigen erobert vnd im gehabt, beyde mit bewehrter Hand vnd Kriegßmacht, zu wider Eroberung deren Landt, vngenommen*, Franckfort am Mayn, 1584, fol. 188b-212b.
- D-13: Feyerabend, *Reyssbuch dess Heyligen Lands, das ist, ein grundtliche Beschreibung aller und jeder Meer und Bilgerfahrten zum Heyligen Lande. Beneben ... eigentlicher Beschreibung ... Palestinz ... Ferner auch der ... Land Indien und Persien ... Endlich von gemeldter Ort ... jetziger Eynwohner, Turcken und Araber*, S. 396-437.
- D-14: Röhrich und Maisner (Hrsg.), *Deutsche Pilgerreisen nach dem Heiligen Lande*, S. 424-429.
- D-15: *Vera et nuova descrizione di tutta Terra santa et peregrinaggio del sacro monte Sinai, compilata da verissimi autori, dal ven. P. frate Luigi Vulcano*, Napoli, 1563.
- D-16: *Een Pelgerimsche Reyse nae de H. Stadt Jerusalem, Die gedaen heeft den E. Jacob Dirckz. Bockenberch van der Goude in Holland ...: claertlyck beschreven en figneytlyc in desen afgebeeldt ...*, Coelen, 1620.
- D-17: *Kurtzer vnd wahrhaftiger Bericht von der Reise aus Venedig nach Hierusalem, Von damen in Aegypten, auff den Berg Sinai, Alcair, Alexandria, vnd folgendis viderumb gen Venedig*, Leipzig, 1579.
- D-18: *Bilgerfahrt vnd Beschreibung der Hierusolomitischen Reiss in das heylig Land vnd deren Provinzen Patestina, wie es zu jetziger Zeit beschaffen*, Constantz am Bodensee, 1603.

- D-19: Gomez-Géraud, M.-C. (éd.), *Guillaume, pèlerin en Terre sainte Jérusalem*, 1565, Paris, 1999.
- D-20: Van Nispen, A., *Verscheide voyagien, ofte reysen gedaen door Jr Joris Van der Does na Constantinopelen, heer Adriaen de Vlaming na Hierusalem, den factoor van den koning van Portugael door verscheide landen*, Dordrecht, 1652, S. 39-89.
- D-21: *Christophori Fùveri ab Haimendorf. Itinerarium Aegypti, Arabiae, Palaestinae, Syriae aliarumque regionum Orientalium*, Norimbergae, 1570.
- D-22: Matković, P. (nap.), *Gjuro Hus hrvat iz Rasimje, glasovit putnik xvi vieka*, Zagrebu, 1881.
- D-23: Röhricht und Maisner (Hrsg.), *Deutsche Pilgerreisen nach dem Heiligen Lande*, S. 432-445.
- D-24: Röhricht und Maisner (Hrsg.), *Deutsche Pilgerreisen nach dem Heiligen Lande*, S. 446-454.
- E-1: *Liber de Perenni culta Terrae Sanctae, et de fructuosa ejus peregrinatione auctore Fr. Bonifacio Stephano Ragusino Praedicatoro Apostolico et Stagni Episcopo*, Venetijs, 1573.
- E-2: *Den wech na Rom en milen tot milen ende wat ghelde onder weghen goet ende van noode is by mi Symon Cock*, 1556.
- F-1: *Der heilig Berg Sinay sampt dessen umbliegenden Orien*, Stuttgartardt, 1653.
- F-2: Adrichem, Christiaan van, *Theatrum Terrae Sanctae et biblicarum historiarum cum tablis geographicis aere expressis*, Coloniae Agrippinae, 1590, fol. 288b.
- F-3: *La nuova et esatta descriptione della Siria e della Terra Santa*, Venezia, 1566.
- F-4: Jongh, A. et Fossier, F. (éds.), *Le voyage de Charles Magius, 1568-1573*, Anthèse, 1992.

表2 移動経路

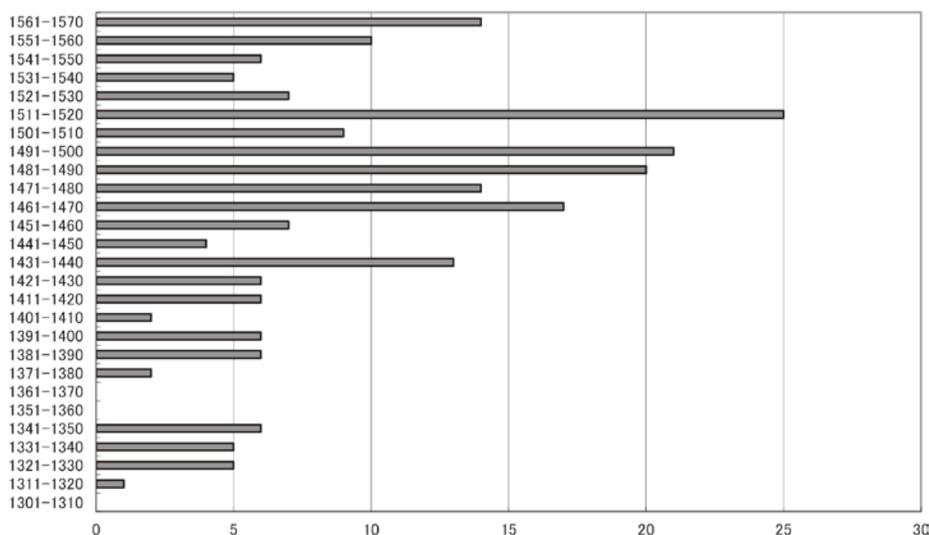
D-1	ヴェネツィア→カンデンディア→エルサレム→ヤッファ→キプロス→ヴェネツィア
D-2	ヴェネツィア→カンデンディア→フアマグスタ→トリポリ→アレクサ→ダマスカス→エルサレム→ラムラ→ヤッファ→キプロス→ヴェネツィア
D-3	ヴェネツィア→カンデンディア→リマソル→ヤッファ→エルサレム→ヤッファ→リマソル→カンデンディア→ヴェネツィア
D-4	ヴェネツィア→サリーネ→トリポリ→アレクサ→アンティオキア→ダマスカス→エルサレム→ベイルート→シナイ山→カイロ→アレクサンドリア→サリーネ→カンデンディア→ロードス→ヴェネツィア
D-5	ヴェネツィア→カンデンディア→フアマグスタ→トリポリ→ベイルート→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ベイルート→トリポリ→フアマグスタ→カンデンディア→ヴェネツィア
D-6	ヴェネツィア→カンデンディア→サリーネ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→アレクサンドリア→カイロ→シナイ山
D-7	ヴェネツィア→カンデンディア→キプロス→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ラムラ→ヤッファ→ダマスカス→イスタンプル→アドリアノーブル→ソフィア→ラグーザ→ヴェネツィア
D-8	ヴェネツィア→カンデンディア→フアマグスタ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ラムラ→ヤッファ→リマソル→カンデンディア→ヴェネツィア
D-9	ヴェネツィア→カンデンディア→サリーネ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ラムラ→ダマスカス→アレクサ→イスタンプル→アドリアノーブル→ソフィア→ラグーザ→ヴェネツィア
D-10	ヴェネツィア→カンデンディア→サリーネ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ダマスカス→ベイルート→トリポリ→サリーネ→ヴェネツィア
D-11	ヴェネツィア→カンデンディア→キプロス→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ラムラ→ヤッファ→ベイルート→サリーネ→ヴェネツィア
D-12	ヴェネツィア→カンデンディア→ロードス→キプロス→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ラムラ→カイロ→シナイ山→カイロ→アレクサンドリア→ミロス→チエリーゴ→ヴェネツィア
D-13	ヴェネツィア→カンデンディア→ロードス→リマソル→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ガザ→カイロ→シナイ山→カイロ→アレクサンドリア→ロードス→チエリーゴ→ヴェネツィア
D-14	ヴェネツィア→カンデンディア→サリーネ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→サリーネ→ヴェネツィア
D-15	ヴェネツィア→カンデンディア→サリーネ→ヤッファ→ベイルート→アンティオキア→ダマスカス→ラムラ→エルサレム→ガザ→カイロ→シナイ山→カイロ→アレクサンドリア→キプロス→カンデンディア→ヴェネツィア
D-16	ヴェネツィア→サリーネ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ラムラ→ヤッファ→キプロス→ロードス→ヴェネツィア
D-17	ヴェネツィア→カンデンディア→リマソル→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ラムラ→ガザ→カイロ→シナイ山→カイロ→アレクサンドリア→カンデンディア→ヴェネツィア
D-18	ヴェネツィア→リマソル→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ラムラ→ヤッファ→サリーネ→ロードス→キオス→ガリポリ→ニコメディア→イスタンプル→カンデンディア→ヴェネツィア
D-19	ヴェネツィア→カンデンディア→フアマグスタ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ヤッファ
D-20	ヴェネツィア→キプロス→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ラムラ→ヤッファ→フアマグスタ→ロードス→ミロス→ヴェネツィア
D-21	ヴェネツィア→カンデンディア→アレクサンドリア→カイロ→シナイ山→カイロ→ダミアエッタ→イェリコ→ラムラ→エルサレム→ダマスカス→キプロス→カンデンディア→ヴェネツィア
D-22	アレクサンドリア→シナイ山→ガザ→エルサレム→トリポリ
D-23	イスタンプル→アレクサ→アンティオキア→ダマスカス→エルサレム→ガザ→シナイ山→カイロ→アレクサンドリア→キプロス→ヴェネツィア
D-24	ヴェネツィア→カンデンディア→サリーネ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ラムラ→ヤッファ→サリーネ→カンデンディア→ヴェネツィア



地図 巡礼者の出身地・出発地

会的混乱がドイツ地域からの巡礼者数の減少を招いたことを背景としたことについてはすでに拙稿で指摘したが⁹⁾、そのような現象は一時的なものであり、1550年代には復調の兆しを見せていたということになる。従って、拙稿で記した「聖地巡礼記の黄金期のエピロー

⁹⁾ 拙稿「後期十字軍再考 (6)」100～115頁；拙稿「後期十字軍再考 (7)」81～82頁。



グラフ 1301～1570年の聖地巡礼記数

グ」という表現もここで修正されねばならない（グラフ）。この背景には、1552年のパッサウ条約および1555年のアウクスブルクの和議によって、宗派間の対立がある程度の落ち着きを見せたことがあろう。なお、7のようなプロテスタントも聖地巡礼を行っていることは、必ずしもその台頭が聖地巡礼の慣行を衰退に導いたわけではなかったことも示している⁽¹⁰⁾。

1632年以降、フランチェスコ会の聖地区管区では受け入れた巡礼者のリストが作成されることとなる。そのリストは1561年にまで遡った所から作成されるが、名簿の散逸のためか、当該時期でリストが残っているのは1561年および1562年のみとなる⁽¹¹⁾。ただし、1562年も一部の記録しか残っていなかったようであり（3人のイタリア人の受け入れを記すのみ）、唯一参考になるのは1561年のリストだけとなる。それを見てみると、フランチェスコ会は同年に全33人の巡礼者を受け入れ、その内で最も多いのがドイツ人の14人、続いて低地地方出身者の6人、イタリア人4人、ボヘミア人3人、スペイン人2人、フラン

⁽¹⁰⁾ なお、17世紀に入ってプロテスタントの巡礼者数が増加傾向にあったことについては、拙稿「厄介者の聖地巡礼者—受入側史料から見た聖地巡礼史—」『中近世ヨーロッパのキリスト教と民衆宗教（平成19年度～21年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書、研究代表者・早稲田大学文学学術院教授・甚野尚志）』2010年（以下、「厄介者」と略記）、103～104頁、を参照。

⁽¹¹⁾ Lauda, P. (Zimolong, B. (Hrsg.)), *Navis peregrinorum*, Köln, 1938, S. 3 f. *Navis peregrinorum* の詳細およびそれが作成された背景については、拙稿「厄介者」103～108頁、を参照されたい。なお、恐らくは1550年代より聖地巡礼者の管理がなされるようになったようであり、本稿が対象とする時期の巡礼記の中には、フランチェスコ会の発行した聖地巡礼証明書が転記されているものがある。2, S. 757; 12, fol. 210b-211a.

ス人1人、出身地不明者3人となっている。1年間のみ情報を切り取って断言することは控えねばならないが、この内訳がD群のそれと似通っていることは単なる偶然ではなからう。

さて、聖地巡礼を希望する者たちがまず向かったのは、やはりヴェネツィアであった(表2)。拙稿で示したように、ヴェネツィアは1545年の元老院決議により巡礼者がヴェネツィア籍の船に乗ることを原則的に禁止し、長らく聖地巡礼を支えてきたヴェネツィアのガレー巡礼船制度を廃止した。ただし同決議には、巡礼者が40人以上集まればガレー巡礼船を用意するという附則が加えられており、この附則ゆえに巡礼者たちは依然としてヴェネツィアを目指したのであろう⁽¹²⁾。1によると、ギリシア人のアンドレアス・クルメリッシがパトロンを務めるテラボッテ号に搭乗した巡礼者数は52人であった⁽¹³⁾。6は、フランス人・イタリア人・フランドル人からなる67人と同じ巡礼船に乗った⁽¹⁴⁾。12は、自身の随行団45人(ここに11と13も含まれる)に加えて、スペイン人やイタリア人など36人の計81人と共にヤーコポ・ヴィチエンティーノの巡礼船に乗った⁽¹⁵⁾。17(18も同じ船に乗る)は、低地地方やドイツ、フランスからの巡礼者52人と同じバランチェラ号に乗船した⁽¹⁶⁾。また7と9は、パトロンのピエトロ・デ・レシーナにキプロスまで運んでもらった後に、そこで他の巡礼船に乗り換えたが、その船には70人の巡礼者が乗っていた⁽¹⁷⁾。同様に、14の場合、ヴェネツィアからサリーネ(ラルナカ)まで運んでもらったフランチェスコ・コルナーロをパトロンとする船には16人しか乗っていなかったが、サリーネで3艘の船が合流してセバスチアーノ・コンタリーニがパトロンを務める巡礼船に乗り換えた結果、乗船者は総勢84名になった⁽¹⁸⁾。これらの数値からも、1550年代以降も定期的に巡礼を目指す者たちがヴェネツィアに集っていたことを確認することができる⁽¹⁹⁾、上記の

⁽¹²⁾ ヴェネツィアのガレー巡礼船制度とその変遷については、拙稿「『無料で運ぶわけではない、神の愛のために運ぶわけでもない』—中世におけるヴェネツィア・ガレー巡礼船のパトロンたち—」『史林』97巻1号、2014年(以下、「パトロン」と略記)、50頁。

⁽¹³⁾ 1, S. 415, 421.

⁽¹⁴⁾ 6, p. 67.

⁽¹⁵⁾ 12, fol. 190a. なお、11の記述では、同行者9人・シュヴァーベン伯と随行団10人・フランケン地方からやって来た集団6人・その他ネーデルラント人やスペイン人などからなる28人の計53人となっており、13の記述では合計63人となっている。11, S. 193 f.; 13, S. 399-401, 405.

⁽¹⁶⁾ 17, fol. Bir. なお、聖地までは17と同行した18は、巡礼者の総計を60人と数え、その内訳をドイツ中南部から7人、ホラントから6人、フランドルから6人、ブラバントから7人、イタリアから4人、修道士15人、司教1人とする。18, S. 15-18.

⁽¹⁷⁾ 7, fol. 1 f.; 9, S. 466, 468.

⁽¹⁸⁾ 14, S. 425 f.

⁽¹⁹⁾ 拙稿「後期十字軍再考(6)」101~113頁; 拙稿「後期十字軍再考(7)」81~82頁。数値は挙げていないが巡礼者集団の構成について記している者として、他に3(フィッラ・カヴェーナ号に、ホラント人・ゼーラント人・ドイツ人・フランス人が乗船)・5(ポルトガル人・カスティージャ人・フランス人・フラマン人・イングランド人・ハンガリー人・ポーランド人など)・19(スペイン人・スラボニア人・フランドル人・ドイツ人など)がいる。3, p. 77; 5, p. 34; 19, p. 55. なお、5のみが陸

D 群やフランチェスコ会のリストほどではないにせよ、巡礼団の構成員の比重が再びドイツ地域に傾きを戻していたことも確認することができよう。また、ガレー巡礼船制度が廃止されて以降も、そのシステムそのもの（契約書・料金設定など）は大きく変化することなく維持され続けていたことも、巡礼記の記述から確認できる⁽²⁰⁾。ということは、地中海世界の情勢が不安定な中においても、ヴェネツィアと聖地を支配下に置くオスマン帝国双方とも、聖地巡礼ツアーという商売を維持していたということになる⁽²¹⁾。

前置きが長くなったが、これらのことを念頭に置きつつ本論に入ろう。

I. ムスリム観・イスラーム観

1. 海上における恐怖

ブローデルが記しているように、プレヴェザの海戦からレパントの海戦までの間の約30年間、ヴェネツィア共和国はオスマン帝国との関係において平和な状態にあった⁽²²⁾。町には教皇、神聖ローマ皇帝、スペイン国王、オスマン帝国の外交使節たちが集うのみならず⁽²³⁾、トルコ人たちが自由に往来していた⁽²⁴⁾。しかし、このような友好的な雰囲気を経験した巡礼者たちも共有していた、というわけではない。依然として「ムハンマドの法」la loi de Mahometの支配下に置かれた聖地への旅は、「非常に無謀で」bien téméraire「とても長く危険な旅」si long et si périlleux voyageであった⁽²⁵⁾。約40年を経てもなお、オスマン帝国がロドス島を占領した際に多くの巡礼者たちも被害にあったとの話や⁽²⁶⁾、オスマン帝国が巡礼そのものを妨害しているとの話が⁽²⁷⁾、これから巡礼を行おうとする者たちを不安に陥れていた。また、トルコ人に対抗するために巡礼船に物々しく装備された火砲は、さらにその不安を煽ったことであろう⁽²⁸⁾。いかに巡礼者たちの心が不安に満ちていたのかは、ヴェネツィアを出港して以降の海上における彼らの記述が、ほぼ恐怖一色であったことか

路で聖地巡礼を行う者も決して少なくなかったことを記している。5, p. 34.

⁽²⁰⁾ 料金設定およびその徴収方法については、1, S. 415; 2, S. 749; 3, p. 77; 6, p. 10; 7, fol. 1 f., 8 f.; 8, S. 510; 11, S. 192; 12, fol. 191a-192a, 196a; 13, S. 401 f.; 14, S. 425; 17, fol. Cil, Ccil; 18, S. 18; 23, S. 444; 24, S. 451 に、契約書については、1, S. 415-422; 11, S. 185-192; 12, fol. 191a-192a; 13, S. 401 f. に記されている。

⁽²¹⁾ 併せて、拙稿「パトロン」56～59頁、を参照されたい。

⁽²²⁾ ブローデル『地中海』9巻、324頁。

⁽²³⁾ 6, p. 15.

⁽²⁴⁾ 19, p. 52.

⁽²⁵⁾ 19, p. 8 f., 47; 20, p. 47.

⁽²⁶⁾ 19, p. 41, 44.

⁽²⁷⁾ 5, p. 32 f.

⁽²⁸⁾ 12, fol. 191a. 21 は、ヴェネツィアとオスマン帝国が戦争状態にあると思っていた。21, S. 117.

らも明白となる。

確かに、ザラの港はオスマン帝国も占領できない強固な町であり⁽²⁹⁾、オスマン帝国にとってイタリア侵略の鍵となるコルフはヴェネツィアが死守しており⁽³⁰⁾、カンディアは占領されることなく⁽³¹⁾、ニコシアはトルコ人の「害悪」*peste* から防衛されており⁽³²⁾、オスマン帝国にとって小アジア支配を完全なものとするための鍵となるファマグスタはヴェネツィアが死守していたこと⁽³³⁾も記されている。しかし、アドリア海はトルコ人海賊の活動領域であり⁽³⁴⁾、レシーナ（フヴァル）はオスマン帝国軍の脅威に晒されており⁽³⁵⁾、ダルマチアの内陸部はオスマン帝国の支配下に置かれていた。税金を支払うことで独立を維持しているラゲーザでも、巡礼者たちの心は恐怖に満ちており、中でも5はそのような状況を「我々の罪ゆえ」*por nossos peccados* と嘆いた⁽³⁶⁾。数年前にオスマン帝国の支配下に置かれたカステル・ヌオーヴォ（ヘルツェグ・ノヴィ）では、神聖ローマ皇帝カール5世指揮の下で町の防衛に当たった300人以上のスペイン人が命を落とすか捕虜にされるなどしており、ブドウア（ブドヴァ）周辺域も同帝国の支配下に置かれていた⁽³⁷⁾。オスマン帝国に占領されて久しいアルバニアでは、同帝国の支配が完遂され、港も封鎖されていた⁽³⁸⁾。上記の通りにコルフ島自体はヴェネツィアが死守していたが、大陸側はオスマン帝国の制圧下であり、同島周辺海域ではオスマン帝国艦隊が自由に航行していた⁽³⁹⁾。プレヴェザ近海ではプレヴェザの海戦の記憶が呼び起こされ⁽⁴⁰⁾、ケファロニア島も危機的状况にあった⁽⁴¹⁾。ヴェネツィア領として維持されていたザンテ（ザキントス）において、ヴェネツィア人はオスマン帝国が同島を征服することは不可能であると胸を張ったが⁽⁴²⁾、現実にはオスマン帝国に税を払うことでようやく維持されている状態であり、しかもその近海はオスマン帝国の大艦隊で覆われており、度々の攻撃に苦しんでいた⁽⁴³⁾。モドンやコロンを拠点

⁽²⁹⁾ 19, p. 57.

⁽³⁰⁾ 2, S. 750; 4, p. 9; 6, p. 18; 21, S. 115.

⁽³¹⁾ 2, S. 750 f.

⁽³²⁾ 5, p. 376.

⁽³³⁾ 4, p. 9.

⁽³⁴⁾ 2, S. 750; 5, p. 41 f.; 12, fol. 208b f.; 24, S. 456.

⁽³⁵⁾ 5, p. 40.

⁽³⁶⁾ 3, p. 77; 4, p. 5; 5, p. 43; 7, fol. 125; 9, S. 506; 11, S. 195; 12, fol. 192b; 13, S. 403, 434. 唯一 21 のみ
が、ヴェネツィアと友好関係にあるラゲーザがオスマン帝国に抵抗していた、との見方をしている。
21, S. 116.

⁽³⁷⁾ 3, p. 80; 13, S. 434.

⁽³⁸⁾ 3, p. 103; 4, p. 5; 6, p. 18; 10, fol. 14; 12, fol. 192b, 208a; 18, S. 21.

⁽³⁹⁾ 3, p. 81; 5, p. 47 f.; 10, fol. 14, 16 f.

⁽⁴⁰⁾ 5, p. 49, 410; 6, p. 19.

⁽⁴¹⁾ 3, p. 81; 5, p. 50; 11, S. 195; 12, fol. 208a.

⁽⁴²⁾ 3, p. 83.

⁽⁴³⁾ 3, p. 83 f., 101 f.; 7, fol. 5; 10, fol. 19; 13, S. 403; 16, p. 31; なお、18 は、同島においてパトロンが
巡礼者たちから受け取った金銭を盗難される、という経験をしている。18, S. 22.

とするモレア海域に至ると、そこはまさにトルコ人海賊の天国であり、10によるとその有様の原因は「我々の罪ゆえ」por nosson peccadosであった⁽⁴⁴⁾。19は、コルフ滞在中にオスマン帝国軍によるマルタ島包囲の報を耳にしたが、モドン・ロドス・ベオグラード・ブダが占領されたことを受けて、マルタ島も時間の問題であると考えた。また彼は、モドンでは多くのキリスト教徒が棄教した、という現実も目の当たりにした⁽⁴⁵⁾。上記のように、クレタ島やキプロス島もヴェネツィアが死守していたが、やはりオスマン帝国に税金を支払ってのことであり⁽⁴⁶⁾、絶えず同帝国の脅威に晒されており、実際に幾つかの町はすでに破壊されていた⁽⁴⁷⁾。両島の間、北方にはロドス島を南限とするエーゲ海が広がっているが、上記の通りにロドス島の陥落は巡礼者たちの記憶にまだ新しく⁽⁴⁸⁾、貢納と引き換えによりやく生きながらえているナクソスなどのアルキペラール諸島は、オスマン帝国の制圧下に置かれている状態であった⁽⁴⁹⁾。このような現状を打開することをスペイン国王に期待を寄せる者もいたが、それは12と19に限定される⁽⁵⁰⁾。

以上のような航海の過程におけるオスマン帝国やトルコ人に対する恐怖は、それまでの時期と大きくは変わらない⁽⁵¹⁾。しかし後に見るように、本稿の対象時期では帰路の途中でトルコ人の捕虜となり奴隷とされてしまった被害者が実際に登場するのである。

2. 強欲なトルコ人役人たち

海上での恐怖を乗り越えて聖地へと降り立った巡礼者たちは、そこでどのような経験を、そしてどのような感情を抱くこととなったのであろうか。1530年までの巡礼者たちは、陸上においても「強欲で横暴な悪党」としてのトルコ人の恐怖と戦わねばならなかった。しかし、1531年から1550年の巡礼者たちは、危険から彼らを守ってくれるトルコ人に対して、概して高い評価を与えることとなった⁽⁵²⁾。このような状況を念頭に置きつつ、本節および次節において、本稿対象時期についての情報を集めてみよう。

巡礼者たちの多くは、やはりヤッファで役人による罵られながらの厳しいチェックと多

⁽⁴⁴⁾ 2, S. 750; 3, p. 101; 7, fol. 5 f.; 9, S. 467; 10, fol. 20; 11, S. 214; 12, fol. 192b f., 207a-208a; 13, S. 432 f.; 17, fol. Cil; 21, S. 3, 113.

⁽⁴⁵⁾ 19, pp. 60-65.

⁽⁴⁶⁾ 4, p. 7; 5, p. 398; 13, S. 404.

⁽⁴⁷⁾ 3, p. 85; 5, p. 62, 68; 6, p. 23; 10, fol. 54 f., 67, 518; 13, S. 404; 15, fol. 6b; 16, p. 102, 104 f.; 18, S. 24; 19, p. 69; 24, S. 454.

⁽⁴⁸⁾ 4, p. 23; 11, S. 196; 12, fol. 206a; 13, S. 404, 431; 16, p. 109; 17, fol. Ciil.

⁽⁴⁹⁾ 10, fol. 20-22; 13, S. 404; 12, fol. 206a f.; 13, S. 431; 15, fol. 203a.

⁽⁵⁰⁾ 12, fol. 209a; 19, p. 73 f.

⁽⁵¹⁾ 拙稿「後期十字軍再考(4)」197～202頁; 拙稿「後期十字軍再考(5)」217～222頁; 拙稿「後期十字軍再考(6)」115～118頁; 拙稿「後期十字軍再考(7)」82～84頁。

⁽⁵²⁾ 拙稿「後期十字軍再考(6)」120～125頁; 拙稿「後期十字軍再考(7)」84～90頁。

額の金銭の要求という洗礼を受けることとなった⁽⁵³⁾。また、ガーディアン（フランチェスコ会聖地管区長）から受ける、ムハンマドを象徴する緑色の服を着ないようにくれぐれも注意せよ、トルコ人は巡礼者を有罪にしたがるから注意せよ、機嫌の悪い異教徒から暴行を受けないように謙虚な態度でいよ、といった忠告は、巡礼者たちの恐怖心をさらに高めたであろう⁽⁵⁴⁾。その後、巡礼者たちはロバの背に乗りラムラに向かうこととなるが、そのロバ代も決して安くはなかった。6によると、トルコ人たちが言うには、彼らの神が歩いた所をキリスト教徒が土足で歩くことは許されないとのことであつたが、彼はその真の理由をトルコ人の強欲さ（ロバ代金の要求）に求めている⁽⁵⁵⁾。ラムラに到着すると、巡礼者たちはさらに入市税と追加の護衛代金を、加えて飲食物を要求された⁽⁵⁶⁾。町には巡礼者たちを狙うアラブ人盗賊集団が巣くっており、確かに役人たちは彼らから巡礼者を護衛してくれた⁽⁵⁷⁾。しかし、それによりまた追加の護衛代が請求されたり⁽⁵⁸⁾、時には役人がいたにも関わらず盗賊に言われるままに金品を差し出さねばならなかった⁽⁵⁹⁾。また、そこにはブルゴーニュのフィリップ善良公が建てた巡礼宿があつたが、7によると護衛を名目として同宿に宿泊するトルコ人役人に掛かる諸経費 58 ドゥカートも巡礼者たちが負担しなければならなかった⁽⁶⁰⁾。このように、トルコ人役人は随所に現れるアラブ人などの盗賊集団から巡礼者たちを防衛してくれるものの⁽⁶¹⁾、概してその都度に追加の護衛費が徴収された⁽⁶²⁾。また、役人がいるにも関わらず、巡礼者たちは盗賊の被害に遭うこともあつた⁽⁶³⁾。

⁽⁵³⁾ 6, p. 26; 7, fol. 9-11; 9, S. 469; 10, fol. 76; 11, S. 196 f.; 12, fol. 193a; 13, S. 405; 16, p. 38; 17, fol. Eiiil; 18, S. 32 f.; 19, p. 82, 93; 24, S. 452. なお、トリポリから上陸した 5 も、その後ヤッファにて同様の経験をしている。5, p. 133.

⁽⁵⁴⁾ 3, p. 89; 9, S. 469; 11, S. 196 f.; 18, S. 32 f.

⁽⁵⁵⁾ 6, p. 26 f.; 12, fol. 193a; 18, S. 32 f., 39 f.; 19, p. 84.

⁽⁵⁶⁾ 5, p. 139 f.; 6, p. 27 f.; 11, S. 197; 17, fol. Eiiir; 24, S. 452 f.

⁽⁵⁷⁾ 5, p. 141 f.; 7, fol. 11; 9, S. 469; 10, fol. 76-79, 90 f.; 11, S. 199; 12, fol. 193b, 196b; 16, p. 39; 18, S. 33, 36.

⁽⁵⁸⁾ 9, S. 469; 24, S. 453.

⁽⁵⁹⁾ 17, fol. Eiiil-Eivir; 19, p. 84 f., 89.

⁽⁶⁰⁾ 7, fol. 13; 9, S. 469; 12, fol. 193b; 18, S. 35; 19, p. 84 f.

⁽⁶¹⁾ 巡礼の阻害要素となるアラブ人などの盗賊・強盗の記述については次の通り。4, p. 20; 6, p. 95, 134; 7, fol. 11; 9, S. 474; 10, fol. 76-79, 90 f., 200 f., 207, 300 f., 327, 334, 346 f., 355-361, 370-372, 378, 385-393, 419 f., 445 f., 480; 11, S. 199, 201, 203, 208-210; 12, fol. 196a-197b, 199a, 200a-201a, 203b; 13, S. 410, 413, 418; 14, S. 426; 15, fol. 194a, 199a; 16, p. 39; 17, fol. Eiiil-Eivir, Hiiil, Jiir, Livl, Miir f., Oil, Oivl-Pil, Qiiil; 18, S. 33, 36, 87; 19, p. 84 f., 89, 161; 21, S. 73, 84-86, 91; 22, p. 97, 102 f., 109 f.; 23, S. 438, 440. 一方で、親切に接してくれたアラブ人に対する賛辞についての記述も、少ないながらもあつた。21, S. 41, 86 f.; 22, p. 97 102 f.; 23, S. 444. また、巡礼者を護衛する役人についての記述は次の通り。2, S. 752 f., 754 f.; 3, p. 90; 5, pp. 139-142, 256, 303, 312 f., 337; 6, pp. 26-28; 9, S. 469, 479; 10, fol. 76-79, 83 f., 95, 413-416, 417 f., 419, 421, 426, 428, 438 f., 445 f., 451-454, 459, 481, 483 f.; 11, S. 208-210; 12, fol. 196a, 197a, 199a, 202a-203b; 13, S. 413-415, 424; 16, p. 89, 98 f.; 17, fol. Eil, Eiiil, Fiil, Jiir, Liil, Niil, Siir, Yiiir, Zir f., Aaiir; 18, S. 33, 87; 20, p. 51; 21, S. 30 f., 33 f., 70, 91; 22, p. 106, 23, S. 435, 443; 24, S. 453.

⁽⁶²⁾ 4, p. 27, 44 f.; 10, fol. 401, 417 f., 445 f.; 11, S. 208 f.; 12, fol. 203a; 13, S. 413 f.; 19, p. 93; 21, S. 30 f.

⁽⁶³⁾ 12, fol. 196a, 197a; 13, S. 413; 14, S. 426; 19, p. 84 f., 89; 21, S. 84-86; 23, S. 438, 440.

さらに、町や聖所に入る都度に課される入場料は巡礼者たちの懐を苦しいものにしたが⁽⁶⁴⁾、役人たちはしっかりと支払いがなされているかを監視しているかのようでもあり、巡礼者にとってはトルコ人役人もアラブ人強盗と同様に恐怖の対象であった⁽⁶⁵⁾。

一方で、護衛の役割を果たすトルコ人役人に対して好意的な形容で表す者もいる〔2・7・10・12・23〕。最も顕著なのが10であり、彼はエルサレムのサンジャクを心の広い「友人」*amigo*と記し、その護衛は「正義を守るため」*por guardar justiça*であったとする⁽⁶⁶⁾。確かに彼は、ある貧しいキリスト教徒に棍棒を投げつける「残虐なトルコ人」*cruel Turco*や、ベタニアでは「最悪の民」*gente pessima*のムーア人も目の当たりにしたが⁽⁶⁷⁾、全般的にはムスリムの親切さを讃えている⁽⁶⁸⁾。このような感情は、10がトルコ人を始めとする現地人に良く接してもらった経験から生じたものであるが、彼がそのような経験を享受できた背景に、そもそも彼はトレント普遍教会会議に出席した後に聖地へと戻るガーディアンとのE-1に同行し、聖地巡礼もその案内の下に行く機会を得ることができたということがあった⁽⁶⁹⁾。また、エルサレムのサンジャクを「友好的」*freundlich*と記す23の場合⁽⁷⁰⁾、彼がバイエルン公アルブレヒト5世の外交使節であったことがその背景にあるのであろう。

通例とは異なり、トリポリに降り立った2の場合、同行したヴェネツィア人商人のおかげで護衛やトルコ人領主の自宅で牛乳や牛肉を御馳走になるなどの歓待を受けることができた⁽⁷¹⁾。一般的な巡礼者が上陸するヤッファとは異なり、商業都市であるトリポリでは巡礼者に対する対応が悪くなかったことは、同じくそこから上陸した4も、ヤッファに至って他の巡礼者たちと合流するまでは、トリポリおよびその周辺域で現地人から親切な対応を受けていたことから解る⁽⁷²⁾。さて、2はその後にダマスクスに滞在している間にスパイ容疑のためトルコ人の役人に捕縛された⁽⁷³⁾。最終的に釈放された後、彼はトルコ人の衣服を身にまとしてエルサレムへと移動することとした⁽⁷⁴⁾。そのために、移動の際も「大いな

⁽⁶⁴⁾ 5, p. 145, 176; 6, p. 34 f., 44, 89; 7, fol. 15 f.; 8, S. 510-512; 9, S. 470; 10, fol. 111, 122, 185-189, 297, 434 f., 467; 11, S. 199 f., 201, 12, fol. 203b; 13, S. 412, 414 f.; 15, fol. 129a, 131b; 16, p. 56, 59 f.; 17, fol. Fiiil, Gil, Kivl; 18, S. 43, 64 f., 68 f., 93, 97; 20, pp. 52-55; 21, S. 59, 62; 23, S. 438, 443; 24, S. 453 f.

⁽⁶⁵⁾ 5, p. 114 f.; 10, fol. 111, 122, 185-189, 323, 398, 446, 458 f., 461, 474, 485 f., 497, 508; 11, S. 199 f.; 12, fol. 204a; 13, S. 406, 408, 411; 16, p. 77, 94-96, 101; 17, fol. Givl, Mir, Qivr; 18, S. 64 f.; 19, p. 93; 20, pp. 52-55, 79 f.; 21, S. 20 f., 46, 51, 59, 62, 92, 94.

⁽⁶⁶⁾ 10, fol. 126, 413-416.

⁽⁶⁷⁾ 10, fol. 283 f., 416.

⁽⁶⁸⁾ 10, fol. 244 f., 295.

⁽⁶⁹⁾ 10, fol. b.

⁽⁷⁰⁾ 23, S. 435.

⁽⁷¹⁾ 2, S. 752 f.

⁽⁷²⁾ 4, p. 9 f., 11-13, 15.

⁽⁷³⁾ 2, S. 753.

⁽⁷⁴⁾ 2, S. 754.

る自由を」mit Frieden guter 享受し、エルサレムの役人や書記も「友好的に」freundlich 対応してくれ、在地のトルコ人からはトルコ語で話しかけられ、皆親切にしてくれたのであった⁽⁷⁵⁾。しかし、幸運は長く続かなかった。逆に、トルコ人の服装をしていたがために、死海を訪れた際にまたもスパイ容疑でトルコ人に捕縛され、サンジャクの家で厳しく調査されることとなった⁽⁷⁶⁾。この時も最終的には釈放されるものの、これ以降の記述にトルコ人を称賛する声は聞かれない。7と12も、確かにトルコ人役人を「友人」Freundtと記す。ただしそれは、それまでは友好的で親切であったはずの役人が、巡礼者が帰路に就く間際に豹変して彼らを捕縛した、という文脈で記されているのである⁽⁷⁷⁾。

結局のところ、特別な状況の下に巡礼を行うことができた10と23を除いて、巡礼者たちは最後まで幸運を享受することはできなかった。7と12が記すように、巡礼を終えて帰路につこうとする巡礼者たちには、最大の試練が待ち構えていたのである。

3. 奴隷とされた巡礼者たち

帰り間際に役人に捕らえられて多額の保釈金を要求されること自体は、1530・40年代を除く15世紀後半以降にも見られたが⁽⁷⁸⁾、当該時期においても1556年には7・8・9の3名がラムラで、1561年には11・12・13の3名がヤッファおよびアレクサンドリアで、1565年には18・20の2名がヤッファでの難を逃れた後に船が難破して流れ着いたロドスで、被害の模様を記している。では、時系列的にそれぞれの顛末を簡単に見てみよう。

1556年8月1日、ラムラに到着した約70人の巡礼者の前に、それまでは「友人」であったサンジャクが現れて彼らを捕縛した⁽⁷⁹⁾。その理由について、7は巡礼者の内の1人がオスマン帝国によるマルタ島攻撃の情報を得るためのスパイとしての容疑を掛けられたため、9は護衛代金についての折り合いがつかなかったためであるとしている⁽⁸⁰⁾。なお、ラムラまで2人に同行していた8は、この段階で難を逃れることに成功したようである⁽⁸¹⁾。いずれにせよ、サンジャクは捕えた巡礼者たちに保釈金を要求する。オスマン帝国と同盟・和睦関係にあったフランス人とヴェネツィア人は無償で釈放されたために⁽⁸²⁾、巡礼者たち

⁽⁷⁵⁾ 2, S. 754.

⁽⁷⁶⁾ 2, S. 756.

⁽⁷⁷⁾ 7, fol. fol. 54; 12, fol. 204a.

⁽⁷⁸⁾ 拙稿「後期十字軍再考 (5)」225～227頁；拙稿「後期十字軍再考 (6)」124～125頁。

⁽⁷⁹⁾ 1556年の出来事については、7, fol. 53-125; 8, S. 512; 9, S. 479-507. による。

⁽⁸⁰⁾ 7, fol. 54; 9, S. 479. なお、スパイ容疑を掛けられた低地地方出身の巡礼者が翌日にガザに連行されて監禁されたことを、9も伝えている。9, S. 480.

⁽⁸¹⁾ 8, S. 512.

⁽⁸²⁾ なお、聖地巡礼において、同盟・和睦関係にあったヴェネツィア人とフランス人が安全であった一方で、敵対関係にあったスペイン人やポルトガル人などが危険な状況に置かれていたことについて

は皆、自分たちがフランス人あるいはヴェネツィア人であると答えた。しかし嘘は通用せず、7と9を始めとする神聖ローマ帝国領内からやって来た者たちは拘留され、各自14ドゥカート⁽⁸³⁾の保釈金を要求された上、状況がダマスクスのバイレルベイへと報告された。バイレルベイからの返事を待つ間、巡礼者たちはヤッファ港に停泊しているガレー船の中で軟禁状態に置かれるか⁽⁸³⁾、ラムラにて拘留され続けた⁽⁸⁴⁾。8月30日、ようやく返事が届くも、その内容は各自100ドゥカートの保釈金の要求、拘留の継続、そして各巡礼者に対する尋問の執行であった。尋問の後に、35人の巡礼者は保釈金を支払った上でヤッファ港を後にしたが、残りの巡礼者たちは再びラムラに連行された⁽⁸⁵⁾。残ったのは、「ルター派の信仰に汚された者たちを含む」mit den Lutherischen Glauben befleckt 者たちであったが⁽⁸⁶⁾、100ドゥカートの保釈金が執拗に要求された。さらに10月3日、そもそも巡礼に必要なスルタン発行の通行許可書をパトロンが受け取っていない事実も発覚し、保釈金は150ドゥカートにまで引き上げられた⁽⁸⁷⁾。11月10日、500の騎兵を伴ってラムラに到着したバイレルベイは、翌日に控えた尋問の前に各巡礼者に対して200ドゥカート⁽⁸⁸⁾を要求する。恐らくは誰も払えなかったのであろう、尋問の結果に有罪の判決が下され、イスタンブールのスルタンの下への護送が決定されたが、それを回避するためには総額100万ドゥカートが必要であることも付け加えられた。ここに及んで事は外交問題に発展し、フランス国王やヴェネツィア共和国の外交官も介入したが⁽⁸⁹⁾、話は平行線のままで解決せず、最終的には翌年4月19日、鉄球のついた鎖で繋がれた巡礼者たちはラムラを出発し、ダマスクス、アレppoやアンティオキアなどを経由して8月2日にイスタンブールに到着した⁽⁹⁰⁾。そこで巡礼者たちを待ち受けていたのは、2年間にも及ぶガラタ塔での悲惨な監禁生活であった⁽⁹¹⁾。彼らに与えられたのは1日1片のパンだけで、硬い囚人服を着させられ、ガレー船の洗浄など日々の強制労働が課せられ、奴隷とされた者たちの間での喧嘩も絶え

ては次の通り。5, p. 98, 438 f.; 10, fol. 242, 457 f., 469, 498; 506; 19, p. 83. ポルトガル人の5は、通行許可書に記載される出身地を偽って巡礼を行っていた。5, p. 114 f., 312 f.

⁽⁸³⁾ 7, fol. 57-63.

⁽⁸⁴⁾ 9, S. 480.

⁽⁸⁵⁾ 7, fol. 64 f. 9は、保釈された巡礼者の数を25人とする。9, S. 481.

⁽⁸⁶⁾ 7, fol. 66. 一方で、9はルター派のような「悪なるキリスト教徒」böse christenが諸悪の根源であるとして怒りの矛先を向けている。9, S. 481 f.

⁽⁸⁷⁾ 7, fol. 74 f. なお、その前の9月15日、8がガーディアンと共に陣中見舞いにやって来ている。9, S. 481.

⁽⁸⁸⁾ 7, fol. 81. 9によると270ドゥカート。9, S. 483.

⁽⁸⁹⁾ 7, fol. 84-87.

⁽⁹⁰⁾ 7, fol. 87-113; 9, S. 485 f. なお彼らは、ダマスクスでヴェネツィア商人のバルトロメオから激励と150ドゥカートの資金援助を得ている。

⁽⁹¹⁾ 9, S. 494 f.

なかった⁽⁹²⁾。その間、ヨーロッパ各国の外交使節は巡礼者たちのためにスルタンに働きかけていた。和睦関係にあったヴェネツィアのバイロ（領事）やフランス王国の外交使節のみならず、ハンガリー王国・スペイン王国・神聖ローマ帝国の外交使節も掛け合ってくれた。最終的にはフランス王国の外交使節による折衝の結果、同使節が100ドゥカート、神聖ローマ帝国の使節が同額を負担することで、奴隷たちの解放が了承された。事の起こりからほぼ3年後の1559年6月11日のことであった⁽⁹³⁾。6月22日に出発した巡礼者たちは、アドリアノーブルやマケドニアを経てラグーザに至った。しかし、そこでも依然として捕虜状態に置かれていた彼らは、護送していたトルコ人から暴行を受けた⁽⁹⁴⁾。ラグーザで乗船して7月28日にヴェネツィアに到着した彼らは、そこで再会したフランス王国の外交使節に深々と頭を下げたのであった⁽⁹⁵⁾。

次に、1561年の出来事を見てみるが、シナイ山巡礼を目指してエルサレムで巡礼団から離れた12・13と、11とは別の話となる。まずは11から見てみると、彼はヤッファにおいて追加の護衛代として20ツェキーノを要求された。出し渋っていると、トルコ人の役人から絞首刑にすると怒鳴られたために提示された金銭を支払わざるをえず、加えて没収されたワインもすべてトルコ人に飲まれてしまった⁽⁹⁶⁾。続いてシナイ山に向かった12と13についてであるが、まず事の起こりは「友人」であったはずのカイロのパシャによる追加の護衛代の請求であった⁽⁹⁷⁾。巡礼者たちの目の前で、イエニチェリにムーア人を斬殺させて脅しながらの要求であった⁽⁹⁸⁾。さらにその間、もう一つの事件が起こった。同行者のアダム・フォン・チューリンゲンによるムーア人に対する暴行事件である。その場にいた他の巡礼者たちも、所持品をすべて没収された上で鎖に繋がれ牢獄に入れられた。結果的に被害者のムーア人は死去してしまい、巡礼者たちは「暴君の法」*Tyrannischer rechtens*で裁かれることに恐怖した。そこにフランス王国のコンスル（領事）が介入し、保釈金300クローネを支払えば問題は解決することに至った。しかし、領事が巡礼者について嘘の証言（内容は不明であるが、恐らくはスパイ容疑か）をしたがために、事態は悪化した。さらに多額の金銭が請求され、トルコ人による巡礼者の調査がなされた。結局、巡礼者たちは提示された金額の金銭を支払ったが、それにも関わらずカイロに連行され、2か月間の奴隷と

⁽⁹²⁾ ただし、その間もワインは飲むことができたようである。9, S. 494-498.

⁽⁹³⁾ 7, fol. 116-119; 9, S. 496-501.

⁽⁹⁴⁾ 9, S. 505.

⁽⁹⁵⁾ 9, S. 507.

⁽⁹⁶⁾ 11, S. 210 f.

⁽⁹⁷⁾ 12, fol. 204a. なお、この段階で12は金銭を支払って問題を解決したようである。

⁽⁹⁸⁾ 13, S. 425. 13は、この出来事がロゼッタで起こったとしている。

しての生活を送らねばならなかった。最終的には、さらに多額の金銭を支払うことでようやく解放され、巡礼者たちは船に乗ってアレクサンドリアを後にしたのであった⁽⁹⁹⁾。

最後に、1565年の出来事を見てみよう。まずはラムラにて、トルコ人の役人が多額の追加金を要求してきたが、その折にオスマン帝国のマルタ島攻囲の失敗の報が飛び込んできたために、トルコ人役人は巡礼者たちにその代償も求めてきた⁽¹⁰⁰⁾。9月21日から10月3日にかけて、主としてドイツや低地地方出身者からなる巡礼者たちは、ヤッファに停泊しているガレー船に監禁された。「大きな飢えと渇き」 *grossen Hunger und Durst* の中、5人の巡礼者が船外に引きずり出されて30人のトルコ人に鞭打たれた⁽¹⁰¹⁾。ここに及んで巡礼者たちは要求された金銭を支払ったようであり、キプロスに到着して安堵した。しかし、キプロス出発後、船の破損と嵐のために座礁してロドス近くの小島に漂着した⁽¹⁰²⁾。その島で何人かがトルコ人に捕まり殴られるなどして死去、生き残った者たちも身ぐるみ剥がされた上に金品を強奪された。フランドル人のヤコブ・スナイデルは、不安に駆られて逃亡を試みるも捕まり、棍棒で殴られて死去した。また、フランス人のジャン・ボシも小さな袋に15クローネを隠し持っていたのが発覚して、暴行の末に死去した。巡礼者たちは一本の鎖で繋がれたまま、抜身のサーベルを持ったトルコ人の監視の下に監禁された。この間に、飢えのためにあるハンガリー人司祭が死亡した⁽¹⁰³⁾。そして11月22日、巡礼者たちはロドスに護送されて投獄された⁽¹⁰⁴⁾。トルコ人役人は40ドゥカートを払えば釈放すると持ち掛けた。これに対して巡礼者たちは、パトロンが支払うべきであると訴え、彼らの怒りの矛先はパトロンに向かうこととなる⁽¹⁰⁵⁾。20を始めとする幾人かの巡礼者は保釈金を支払ったようであり、12月12日に釈放されているが⁽¹⁰⁶⁾、18など支払い能力のない者たちは、そのまま監禁され続けた。翌年の1月16日まで、パトロンとサンジャクとの間で話し合いがもたれるが、最終的にパトロンも有罪として処罰され、保釈金も3,260クローネにまで跳ね上がった。1人の女性と3人の修道士を含む者たちは、飢えと渇きの中で「半

⁽⁹⁹⁾ 13, S. 425-430. なお、この事件については、「厄介者の巡礼者」が問題の一因になっている点でも興味深い。このように問題を起こす巡礼者については、拙稿「厄介者」104～108頁、を参照されたい。

⁽¹⁰⁰⁾ 18, S. 98 f. なお、同年に聖地巡礼を行った19もマルタ島に関する情報を聖地にて得たが、彼は他の巡礼者とは行動を異にしていたようである。19, p. 180. また、やはり同年に聖地巡礼を行った17はシナイ山巡礼を目指してカイロに向かったため（カイロにて21と合流）、難を逃れたようである。17, fol. Liil-Niil; 21, S. 33-42.

⁽¹⁰¹⁾ 18, S. 99 f.; 20, pp. 79-81.

⁽¹⁰²⁾ 18, S. 107-110; 20, p. 84.

⁽¹⁰³⁾ 18, S. 110-114.

⁽¹⁰⁴⁾ 18, S. 114; 20, p. 86.

⁽¹⁰⁵⁾ 18, S. 115-118.

⁽¹⁰⁶⁾ 20, p. 87.

死状態」hulb todtのまま、「悪魔」Teuffelのサンジャクに耐え難いガレー船での強制労働を課せられた⁽¹⁰⁷⁾。そのような状況の中、ヴェネツィア共和国からアンジェロ・デル・ブレシアが保釈金を携えてカンディアまでやって来ているとの報告がもたらされた。しかし彼は中々現れず、イタリアやマルタを攻撃するためのガレー船内での強制労働の中で幾人かの巡礼者が死去し、4月13日に生き残った巡礼者たちはイスタンブルに移送されることが決まった⁽¹⁰⁸⁾。5月7日に到着したニコメディア(イズミット)において、すでに600クローネを没収された上に捕縛されたロッテルダムの(聖ヨハネ?)騎士修道会士ウィレム・ミレカントが奴隷の仲間に加わったが、8月19日の段階での生存者は5名のみとなった⁽¹⁰⁹⁾。さらに翌年の3月24日、ガリポリなどで強制労働を強いられながら巡礼者たちはイスタンブルに到着した。18にとって幸運であったのは、4月19日にヴェネツィアの領事(バイロ)のアントニオ・アンジェロが、18とグレゴリー・ランドルフ・フォン・グラリスとの2人を480クローネでサンジャクから買い戻してくれたことであった。聖ソフィア大聖堂などの観光を楽しんだ後、6月17日にハニアに到着し、18より後に解放された2人の修道士と1人の修道女とゴルフで合流してヴェネツィアに戻ることができた⁽¹¹⁰⁾。事の起りからおよそ2年後のことであった。

以上のように、この時期の巡礼者の中には長期間の奴隷状態を経験せざるをえない者が実際に現れたのである⁽¹¹¹⁾。彼らは、巡礼記作者という範囲においてのことではあるが、ホラント出身の20を除いてはいずれも神聖ローマ帝国領内の者たちであった。彼らの経験はその十字軍観や聖地回復の希望などに影響を与えることになったのであろうか。

4. イスラーム信仰者としてのトルコ人

当然のことながら、巡礼者たちは巡礼の過程において、現地人たちの信仰実践の状況や、キリスト教教会の現状を目の当たりにした。まずこの時期においても目立つのは、トルコ人を始めとするムスリムもキリスト教徒と同じものを信仰の対象としていることについての記述であるが、もはやそれについて何がしかの評価が加えられることはない⁽¹¹²⁾。また、モスク化されたがために、あるいは破壊されたがために立ち入ることができなくなったキ

⁽¹⁰⁷⁾ 18, S. 119-121.

⁽¹⁰⁸⁾ 18, S. 122-132.

⁽¹⁰⁹⁾ 18, S. 132-147.

⁽¹¹⁰⁾ 18, S. 153-181.

⁽¹¹¹⁾ なお外交使節の23は、ヤッファにおいて奴隷とされた26人の巡礼者を目撃している。23, S. 442.

⁽¹¹²⁾ 4, p. 15, 23, 38, 57; 7, fol. 38; 9, S. 475; 10, fol. 255-262, 270, 276, 278, 296, 300, 309, 315, 338 f., 368, 396, 436; 15, fol. 97a, 123a; 16, p. 74; 17, fol. Oil; 19, p. 112, 116; 21, S. 70, 72. なお、アブサロンに対するムスリムの敵意についての記述は、この時期にはほとんど見られなくなる。10, fol. 266; 20, p. 67.

リスト教教会や聖所についても、これまでと同様に多くの記述がなされ⁽¹¹³⁾、中にはキリスト教徒に管理が委ねられた教会や⁽¹¹⁴⁾、入場料を支払うことで立ち入ることのできた教会について記しているものもある⁽¹¹⁵⁾。当該時期の特徴として挙げられるのは、まず、1530年代以降にトルコ人の高評価に繋がった後者二つに関する記述がその数を大きく減らしていることである。加えて、イスラーム支配下に置かれて久しいソロモン神殿に関して、12は「トルコ人のくそ坊主」Turckischen Pfaffenが中で祈りを捧げていると揶揄し、15は「嘘つきのトルコ人」farsi Turchiが独占していると嘆く⁽¹¹⁶⁾。よしんば聖所に立ち入れたとしても、そこはトルコ人の厳しい管理・監視下に置かれ、ことごとくに多額の入場料を要求されるばかりであり⁽¹¹⁷⁾、さらにトルコ人たちから様々な嫌がらせを受けたのであった⁽¹¹⁸⁾。ただし、このような状況も、それまでの時期と比べて、大きな特徴があるわけではない。

では、この時期にトルコ人に対する高評価が見られなくなった原因はどこにあったのであろうか。それは、1551年にトルコ人がフランチェスコ会聖地管区の本部の置かれるシオン山修道院を占拠したことにあった⁽¹¹⁹⁾。翌年には同修道院からフランチェスコ会士たちが追い払われ、そこはモスク（恐らくはミレットの付設）となって壁で覆われ、当然のことながら巡礼者たちはそこに立ち入ることも宿泊することもできず、エルサレムの城壁外で夜を過ごさざるをえなかった。このような情報を提供してくれる4の場合、夜間であれば無料でシオン山に立ち入る許可と門の鍵を受け取ることができたが⁽¹²⁰⁾、巡礼者の多くはそこを訪れることすらできなかつたようである。その後、遅くとも1554年にはキリスト教徒によるシオン山への立ち入り制限は解除されてフランチェスコ会士たちの居住も再び認められたが⁽¹²¹⁾、多額の入場料を支払わねばならず⁽¹²²⁾、声高にミサをあげることも許され

⁽¹¹³⁾ 2, S. 754 f.; 4, p. 9 f., 16, 32, 37, 42 f., 46, 50, 53, 58, 64, 71; 5, p. 212, 316; 6, p. 30 f., 44, 48, 65, 74, 98 f.; 7, fol. 12 f., 31 f., 35, 38, 41, 47, 50; 8, S. 510; 9, S. 469, 473, 474, 475 f., 486, 492 f.; 10, fol. 140-144, 192, 214, 223-225, 228-234, 246, 249, 279, 299, 318, 340, 437; 11, S. 201; 12, fol. 194a f., 202a; 13, S. 409 f., 412, 420; 15, fol. 189a; 16, p. 63 f.; 17, fol. Hil, Liiir, Miiir, Bbiir; 18, S. 43, 84, 92, 95; 19, p. 11 f., 84 f., 105 f., 109, 112, 117, 138; 20, p. 62; 21, S. 8, 10, 17, 23, 47, 57 f., 65, 70 f.; 22, pp. 105-107; 23, S. 437, 441.

⁽¹¹⁴⁾ 4, p. 11 f., 26, 32; 6, p. 34, 45, 69; 10, fol. 138; 12, fol. 195b; 19, p. 108, 111; 21, S. 100.

⁽¹¹⁵⁾ 4, p. 71; 6, p. 30 f., 74, 98 f.

⁽¹¹⁶⁾ 12, fol. 194b; 15, fol. 134b.

⁽¹¹⁷⁾ 2, S. 755; 4, p. 17, 27, 44; 5, p. 176; 6, p. 35, 44, 89; 7, fol. 15 f.; 8, S. 510-512; 9, S. 470; 10, fol. 111, 116, 132, 185-189, 122, 127, 297; 11, S. 199 f., 201; 13, S. 406; 15, fol. 129a, 131b; 16, p. 59 f.; 17, fol. Gil; 18, S. 64 f., 68 f., 93; 19, p. 154; 20, p. 54 f.; 21, S. 59, 62; 24, S. 453.

⁽¹¹⁸⁾ 4, p. 45; 17, fol. Liil; 19, p. 131; 20, p. 54 f.

⁽¹¹⁹⁾ 1, S. 422; 18, S. 43; 19, p. 95 f. ただし、上述のようにトルコ人に対して好意的な見方をする10のみ、この点について「我々の罪ゆえ」por nosson peccadosと記す。10, fol. 96.

⁽¹²⁰⁾ 4, pp. 21-27, 53. なお、エルサレムの城壁外での宿泊については、9, S. 478; 17, fol. Kiir f.にもみられる。

⁽¹²¹⁾ 5, p. 147.

⁽¹²²⁾ 6, p. 34 f.; 7, fol. 15, 52; 8, S. 510; 10, fol. 189, 191, 203, 206; 13, S. 408; 16, p. 77; 17, fol. Kivl; 19, p. 112, 114 f.

ず⁽¹²³⁾、時にはトルコ人が闖入しては巡礼者たちに罵声を浴びせながら騒ぎを起こし、それを解決するために巡礼者たちはまたもや金銭を出さねばならなかった⁽¹²⁴⁾。フランチェスコ会士たちも、大いなる「不安」Sorgの中でトルコ人たちに苦しめられていた⁽¹²⁵⁾。一方で、このような状況においても、フランチェスコ会士たちがシオン山に居住する許可を与えていることの中に、トルコ人の寛容さを見て取る者もいる⁽¹²⁶⁾。しかし、やはりその寛容さの背後にはフランチェスコ会から受け取る多額の税という金銭が絡んでおり、かつ厳しい監視体制があったのである⁽¹²⁷⁾。19は、現地のあるフランチェスコ会士からムスリムの葬儀は素晴らしく、トルコ人は「大きな思いやりの心」*une bonne charité*を持っている、との言葉を聞いたが、それに対して同行者の修道士ジェラルは、「それではお前はムハンマドの弟子のように死にたいのか?…私は嫌だ!」*Voudrais-tu donc mourir comme un disciple de Mahomet?…Non pas!*と叫んだのであった⁽¹²⁸⁾。

確かに、このフランチェスコ会士のように、巡礼記作者の中にもトルコ人と接することで彼らに対して好印象を抱いた者もいる。15は、トルコ人の信仰する教義自体は罪深いものであるが、彼ら自身は「礼儀正しく」*civili*、「良き人であり」*benefattori*、「約束において誠実であり」*veridici nelle promesse*、「キリスト教徒に対して忠実な」*fideli à' Christiani*者たちである、と記している⁽¹²⁹⁾。しかし、人としてのトルコ人を信仰と切り離して見ているのはこの時期においては彼のみである。他の多くの者たちの頭の中では、経験を通じて再びイスラーム信仰とそれを実践するトルコ人とが憎悪に近い感情の中で密接に結び付くこととなったのである⁽¹³⁰⁾。

その中には、クルアーンなどを取り上げてイスラームを神学的側面から批判している者もあり [5・6・19]⁽¹³¹⁾、彼らは聖地回復の希望も巡礼記の中に盛り込んでいるのである。この点についての検討は次章に譲ることとして、ここでは、彼らがカトリック圏内の教会人という共通項を持つことを確認しておきたい⁽¹³²⁾。

⁽¹²³⁾ 6, p. 29.

⁽¹²⁴⁾ 12, fol. 196a; 19, p. 130 f.

⁽¹²⁵⁾ 11, S. 203; 18, S. 78.

⁽¹²⁶⁾ 6, pp. 150-157; 10, fol. 138, 196, 265, 279, 297; 19, p. 114 f.; 21, S. 96.

⁽¹²⁷⁾ 6, pp. 150-157; 10, fol. 168-173.

⁽¹²⁸⁾ 19, p. 151 f.

⁽¹²⁹⁾ 15, fol. 175a f. ただし一方で、この記述の直前に、クルアーンで禁じられてははずのワインを堂々と飲んでいるトルコ人とムーア人は悪である、とも記している。15, fol. 172b-174b.

⁽¹³⁰⁾ 4, p. 15; 5, pp. 77-97; 6, 70, 139-142; 19, p. 23, 97-99, 137; 21, S. 38, 52-55, 63. なお、ほとんど感情を織り交ぜることのない記述は次の通り。10, fol. 240, 249 f., 310, 431, 511 f.; 12, fol. 196b, 204a; 13, S. 415, 421, 436 f.; 15, fol. 134b; 17, fol. Lil, Siir f., Tivl-Yiil, Yivl; 19, p. 65, 94; 21, S. 15; 22, p. 84; 24, S. 453. ただし、これらの記述でも概して主語が「トルコ人」となっている。

⁽¹³¹⁾ 5, pp. 79-97; 6, pp. 139-142; 19, pp. 97-99.

⁽¹³²⁾ なお、5はルター派を「懐みのない」*desputa*ものとして、マルティン・ルターを「嘘つき」*fari-*

ここで、本章で得られた情報を簡単に整理しておこう。

幸運にもガーディアンと行動を共にすることができた10と外交使節であった23を除き、総じてこの時期の巡礼者たちは、人としてもムスリムとしても、経験を通じて「トルコ人」に対する悪印象を抱くこととなった。このことは、1530年代および1540年代に見られた「トルコ人」に対する高評価が⁽¹³³⁾一時的な現象に過ぎなかったことを示すこととなる。1550年代以降に「トルコ人」に対する見方が悪化した背景には、一つには貪欲な「トルコ人」が実際に巡礼者を奴隷にするという出来事が生じたこと、もう一つには1551年に「トルコ人」がシオン山を占拠したという事件が生じたことである。

後者の点がとりわけカトリック圏内の教会人の反イスラーム感情を高め、それが強い聖地回復の希望に繋がっていくことについては予め触れておいたが、その他の者たちの反「トルコ人」感情も、十字軍観や聖地回復の希望と結び付くこととなったのであろうか。次章にて検討したい。

II. 十字軍観・聖地回復の希望

1. 聖墳墓の騎士

本稿で対象とする時期において聖墳墓の騎士に言及するのは、1・7・11・12・13・14・16・17・18・19・20・21・24の13名となる。その内、11・12・13・16・20・21・24は騎士叙任の儀礼について詳細に記し⁽¹³⁴⁾、1・12・13・24が騎士叙任を受けた者の名を列挙し⁽¹³⁵⁾、12・13・18が、儀礼そのものを邪魔することはないものの、儀礼会場がトルコ人の管理下に置かれているがために彼らに金銭（1人10ドゥカート）を支払う必要があることを記し⁽¹³⁶⁾、16は儀礼の最後にガーディアンに対して各自2ドゥカートを支払ったこ

seusとして批判し、19も同様にカルヴァン派やルター派を強く批判している、という点でも共通する。5, p. 378; 19, p. 14, 21, 30. 他にルター派などのプロテスタントを批判しているのは、上記の9を除いては、10のみである。10, fol. 482.

⁽¹³³⁾ 拙稿「後期十字軍再考(7)」87～90頁。

⁽¹³⁴⁾ 11, S. 205-208; 12, fol. 195a-196a; 13, S. 435 f.; 16, pp. 81-84; 20, pp. 74-78; 21, S. 61 f. なお、聖墳墓の騎士の儀礼の詳細については、拙稿「14世紀～16世紀前半の聖地巡礼記に見る「聖墳墓の騎士」一儀礼へのフランチェスコ会の関与過程を中心に」長谷部史彦編『中近世地中海世界の旅人と旅の記述』慶應義塾大学出版会、2014年、185～215頁、を参照。

⁽¹³⁵⁾ 1, S. 423; 12, fol. 194b f.; 13, S. 406, 411; 24, S. 453. なお、恐らくは、1550年代から巡礼者の管理名簿が作成されたのと同時に、聖墳墓の騎士の管理名簿も作成された。そして、*Navis peregrinorum* が作成され始めたのと同時に、*Regstrum Equitum SSmi Sepulchri D. N. J. C.* も作成され始めた。両者は同じ所で管理されており、従って、聖墳墓の騎士の管理名簿も当該時期において現存するのは、1561年と1562年の2年間のみとなる。Piccirillo, M. (a cura di), *Regstrum Equitum SSmi Sepulchri D. N. J. C. (1561-1848)*, Jerusalem/Milano, 2006, pp. 2-5.

⁽¹³⁶⁾ 12, fol. 195a f.; 13, S. 407; 18, S. 79 f. なお、21は聖墳墓の騎士を聖ヨハネ騎士修道会と完全に同一視した上で、同騎士修道会がエルサレム国王ボードワン3世によって創設されたという誤った情報

とを記す⁽¹³⁷⁾。ただし、これらの情報の中からこの時期ならではの特徴を見出すのは難しい。

唯一触れておくべきは、19が儀礼にゴドフロワ・ド・ブイヨンの剣が用いられていたことを記していることである⁽¹³⁸⁾。1531年から1550年の時期を対象とした拙稿で確認したように⁽¹³⁹⁾、フランス人の中で聖墳墓の騎士と十字軍の記憶とが融合していたことを、そこにも確認することができるからである。

2. 「十字軍」の記憶

本稿で対象とする時期においても、多くの巡礼者たちはゴドフロワ・ド・ブイヨン以下の歴代エルサレム国王たちの墓などを目にする事となるが、そこに特別な感情を付加するような記述は見られず⁽¹⁴⁰⁾、この点では1550年以前との大きな違いは確認されない⁽¹⁴¹⁾。このような中で、ナラティヴな形で「十字軍」の歴史情報を付け加えるのは、5・6・9・15・18・19の6名となる。ただし、5はエルサレムなどが国王ギー・ド・リュジニヤンの時にサラフッディーンによって占領されたことを簡略に記すのみである⁽¹⁴²⁾。また19も、聖地巡礼記では珍しいが、ギー・ド・リュジニヤンの統治期からヴェネツィアの支配下に入るまでのキプロス王国の歴史を概観するのみである⁽¹⁴³⁾。

それに比して、残りの者たちはある程度の頁を割いている。9の記述は、ムハンマドの登場に始まり、カール大帝の巡礼、セルジューク朝の進出、ゴドフロワ・ド・ブイヨンによる聖地周辺域の占領、サラフッディーンによるエルサレムなどの占領と続き、1219年（1229年の誤りであろう）にエルサレムが一時的に回復されるものの、その後再び（マムルーク朝の）スルタンの手中に落ち、1515年（1516年の誤りであろう）にオスマン帝国の支配下に置かれた、というところで終わる⁽¹⁴⁴⁾。事実的情報の列挙のみという印象は受けるものの、ここに「十字軍」を過去のものとして現状とは切り離すという、ドイツ地域

を記している。21, S. 59.

⁽¹³⁷⁾ 16, p. 84. なお、ごく簡素な記述に留まるのは次の通り。7, fol. 26; 14, S. 427; 17, fol. Kiil.

⁽¹³⁸⁾ 19, p. 148.

⁽¹³⁹⁾ 拙稿「後期十字軍再考 (7)」90~92頁。

⁽¹⁴⁰⁾ 4, p. 29, 53; 6, p. 27, 39; 7, fol. 23; 8, S. 511; 9, S. 472; 12, fol. 193b; 16, pp. 48-50; 18, S. 77; 19, p. 125, 140, 158; 21, S. 59 f. もう一つの多く見られるトピックであるイングランド国王リチャード1世によるキプロス占領についても同様である。7 fol. 7; 9, S. 468; 10, fol. 66. なお、これら以外のトピックとしては、4がヴェネツィアによるコンスタンティノーブル占領について、17がエルサレムにあった聖ヨハネ騎士修道会の本部跡について、19がヤッファを再建した聖王ルイについて触れているのみである。4, p. 3; 17, fol. Givr f.; 19, p. 82.

⁽¹⁴¹⁾ 拙稿「後期十字軍再考 (6)」128頁; 拙稿「後期十字軍再考 (7)」91頁。

⁽¹⁴²⁾ 5, p. 166, 183 f., 316.

⁽¹⁴³⁾ 19, p. 69.

⁽¹⁴⁴⁾ 9, S. 479.

に特徴的な十字軍観を再確認することができよう⁽¹⁴⁵⁾。ロドスの歴史を組み入れているものの、18についても同様のことが確認される⁽¹⁴⁶⁾。

6の場合、イスラーム信仰についての記述に続く形で、クレルモン教会会議からフルク・ダンジューまでの歴史が概観される⁽¹⁴⁷⁾。また別の個所で、シャルルマーニュの聖地巡礼についても触れてはいる⁽¹⁴⁸⁾。しかし、こういった情報の中に、これまでの時代に見られたフランス地域における十字軍観の特徴を見出すことはできない⁽¹⁴⁹⁾。最も詳細な歴史情報を随所に鏤める15も同様であり、恐らく彼はギョーム・ド・ティールの年代記を参考にしたのであろう、その記述のほとんどはボードワン4世統治期までとなる。ただしその特徴として挙げられるのは、併せて聖書からの引用も挿入しており、十字軍の歴史というよりは十字軍国家の時期までの聖地のキリスト教教会にまつわる歴史を記している、ということである⁽¹⁵⁰⁾。

以上のことは、1550年代以降には全般的に十字軍の歴史が過去化する傾向が強まり、そこに地域的な偏向は見られなかった、ということを示しているようである。

3. 聖地回復の希望と十字軍の希望

ただし、6と15はその巡礼記の中で強く聖地回復を呼びかけてもいる。本稿の対象時期の中では、彼らに加えて5と19との計4人が来るべき十字軍についての記述を残している。すべての者が、カトリック圏内の教会人である、ということを経済確認しておく。ただし19の場合、エルサレムにおいて会話を交わした10とのやり取りの中で、5,000人の兵があれば聖地は解放されるのに、誰もそれを行おうとしないことに対して嘆くのみである⁽¹⁵¹⁾。ガーディアンと行動を共にしていた10がトルコ人に対して好意的な見方をしていることは上述の通りであるが、19の嘆きは10に対する反感として捉えられよう。

次に5について、彼がムハンマドやクルアーンに対する論駁を展開していることは上述の通りであるが、それに続いてトルコ人がキリスト教徒に対して戦いを仕掛けてきたこと、その中で多くのキリスト教徒の血が流されてきていることを記した上で、全キリスト教徒にトルコ人に対するために立ち上がるように呼びかけている⁽¹⁵²⁾。オスマン帝国の敵対者と

⁽¹⁴⁵⁾ 拙稿「後期十字軍再考(6)」129～130頁；拙稿「後期十字軍再考(7)」91～92頁。

⁽¹⁴⁶⁾ 18, S. 77 f., 123-127.

⁽¹⁴⁷⁾ 6, pp. 139-149.

⁽¹⁴⁸⁾ 6, p. 52.

⁽¹⁴⁹⁾ 拙稿「後期十字軍再考(6)」130～131頁；拙稿「後期十字軍再考(7)」92頁。

⁽¹⁵⁰⁾ 15, fol. 11b-12b, 14a, 15b f., 17a, 18a, 19b, 24b, 26b, 27b, 30a, 33b, 34b, 46a, 66b, 86a, 149a-158a, 164a-165a, 167b f., 178a f., 183b, 186b, 189b.

⁽¹⁵¹⁾ 19, pp. 99-101.

⁽¹⁵²⁾ 5, pp. 92-97.

してのポルトガル人である彼の場合、「十字軍」の歴史という文脈の中ではなく、国家間の対立に加えて、聖地周辺域とりわけ 1551 年に占拠されたシオン山が同帝国の支配下に置かれているという現状の中で、イスラームの信仰者としてのトルコ人に対する敵対心を剥き出しにしている。この点においては、かつて拙稿で確認したスペイン人の十字軍観と類似していることが解る⁽¹⁵³⁾。

また 15 についても同様である。上記のように、確かに彼は「十字軍」の歴史についての詳細を随所で述べるが、彼が十字軍の希望について記すのはその巡礼記の末尾に置いた「エルサレム哀歌」*Lamento di Gerusalemme* 中においてである⁽¹⁵⁴⁾。そこで彼は、スペイン国王とフランス国王、ヴェネツィアおよびナポリ国王が連携すれば、聖地は回復されると記す。そこにかつての「十字軍」との連続性を見出すことはできない。当時のナポリ王国はスペイン国王の支配下にあり、そのために彼はキリスト教国家の連合軍の筆頭にスペイン国王を挙げているのであろう。これらの点において、15 は 5 と十字軍観を共有していたと言える。しかし一方で、イタリア半島に住む 15 は、トルコ人が「我々の地」*alle nostre terre* まで来ているので「戦いに遅れるな」*non tardar' à prender la battaglia* とも訴えている。上記のように、彼は聖地で出会った「トルコ人」を人として称賛してもおり、総合的に考えると、その十字軍観は聖地の回復よりも、危機的状況にあるキリスト教世界の防衛に重きが置かれていたと考えられるのである。

では最後に 6 について見てみる。表 1 の備考欄に記したように、そもそも彼の作品はロレーヌ公シャルル 3 世の従妹ルイズに捧げたものであり、その冒頭には彼女に宛てた書簡が挿入されている。そこには次のようなことが書かれている。かつて聖地は「野蛮な」*barbare* トルコ人とサラセン人の手と力で覆われていたが、ゴドフロワ・ド・ブイヨンが回復した。ゴドフロワやボードワン 1 世は、ルイズの家系であるロレーヌ家出身である。ただし、現状では聖地やその他のキリスト教徒の領域はトルコ人の支配下に置かれている。しかし、聖地には教皇・神聖ローマ皇帝・フランス国王・スペイン国王・ヴェネツィアの外交使節が多数いて様々な情報を集めており、今やフランス国王や他の国王・諸侯によって聖地を回復することが可能な時期に来ている、と⁽¹⁵⁵⁾。ここには、歴史と現状の融合、というフランス人的な十字軍観を見ることが出来る⁽¹⁵⁶⁾。その一方で、6 は別の個所でも聖地回復を全キリスト教徒に向けて強く呼びかけている。上記のように、フルク・ダンジュー

⁽¹⁵³⁾ 拙稿「後期十字軍再考 (6)」131～132 頁。

⁽¹⁵⁴⁾ 15, fol. 209a-211a.

⁽¹⁵⁵⁾ 6, pp. 2-9.

⁽¹⁵⁶⁾ 拙稿「後期十字軍再考 (6)」130～131 頁；拙稿「後期十字軍再考 (7)」95～96 頁。

までの歴史を記した後に、その記述は聖地のフランチェスコ会士たちの置かれた現状、すなわち彼らは異教徒から敬意を払われているものの多額の税を課されているために苦境に立たされているという状況へと続き、そしてその後に聖地回復を呼びかける記述へと進むのである⁽¹⁵⁷⁾。このようなコンテキストで現れる聖地回復の希望が、1551年のシオン山占拠という事件にも起因していることは明白である。

おわりに

1550年代以降に地中海情勢は悪化したが、ヴェネツィアとオスマン帝国支配下の聖地とを結ぶ聖地巡礼のシステムは維持され続けた。加えて、ドイツ地域からやって来る巡礼者数が再び増加したために、「聖地巡礼の黄金期」は終焉にまで至ることはなかった。しかし、その地中海情勢の悪化に起因する形で、本稿の対象時期には二つの大きな出来事が生ずることとなった。一つは、奴隷とされる巡礼者の増加であり、もう一つは1551年のオスマン帝国によるシオン山の占拠であった。このような新たに生じた出来事は、人としても異教徒としても「トルコ人」に対する反感を、経験を通じて巡礼者たちの中で強めることとなったが、それは同時に過去に生じた「十字軍」の過去化をより一層に促進することとなった。シオン山の占拠事件は、過去の「十字軍」とは切り離された形で、新たな聖地回復や来るべき「十字軍」に対する強い希望へと繋がることとなった。また、断片的ではあるが、フランス人巡礼者の記述の中に、フランス地域で伝統的な形の十字軍観を確認することもできた。しかし一方で、「トルコ人」の奴隷とされた経験がそれらに繋がった痕跡は確認されなかった。

本稿での分析結果を簡単にまとめると以上のようなになるであろう。本稿で対象とした聖地巡礼記を見る限りにおいては、奴隷とされた者はドイツ地域出身者が多く、「十字軍」の希望を訴える者は、いずれもカトリック圏内の教会人である。このような傾向が、果たして地域差等に起因するのか否か、判断を下すにはもう少しサンプルが必要である。1571年に起こったレパントの海戦がどのような影響をもたらすことになったのかということと併せて、この点については次稿にて確認したい。

(本稿は、2015年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究C)による研究成果の一部である。)

⁽¹⁵⁷⁾ 6, pp. 150-162.